

貝塚市埋蔵文化財調査報告第11集

# 貝塚市遺跡群発掘調査概要VIII

1986・3

貝塚市教育委員会

## はじめに

貝塚市が国庫補助事業の一環として実施してまいりました貝塚市内遺跡群の発掘調査も昭和53年度以来、8年目を迎えることになりました。

貝塚市にとって多発急増の一途をたどる近年の開発行為の中で、そのほとんどが開発行為に伴う緊急発掘調査となっています。調査にあたっては、面積的あるいは期間的な制約の加わる中での調査が多く、十分な調査成果を得られていないのも実情であります。

今回の調査もこうした開発行為等に伴う事前調査であります。幾多の成果を得ることができ、ここに昭和60年度中に実施しました発掘調査の調査結果を一部報告するとともに本書がみなさま方の文化財に対するご理解を深めて頂く一助となれば幸いと存じます。

なお、今回の調査にあたり土地所有者の方々をはじめ、関係者各位には多大のご協力を頂き本書を発刊することができましたことを末筆ではありますが深く感謝致します。

昭和61年3月

貝塚市教育委員会

教育長 岡 根 和 雄

## 例 言

1. 本書は貝塚市教育委員会が昭和60年度国庫補助事業の一環として計画し、社会教育課が担当実施した貝塚市内遺跡群発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は、社会教育課 西岡巖・勝浦康守を担当者として昭和60年4月1日に着手し、翌昭和61年3月31日をもって終了した。
3. 発掘調査並びに整理作業にあたっては、下記の諸氏の参加を得て実施した。  
外業・内業調査員 嘉積由彦  
外業調査補助員 西野貴也・小林修  
内業調査補助員 山本和枝・藤原久子・芝野久美子・小林修・西野貴也
4. 本書の作成にあたっては、編集並びに執筆は西岡が行い、整理作業は上記の参加者で行ったほか、土器復元作業を山本が、遺物の写真撮影を嘉積が行い、遺物実測図およびトレース作業の大半を嘉積、藤原が担当した。また、遺物整理に伴う観察表の作成は勝浦が担当した。

# 目 次

はしがき  
例 言  
目 次  
本文目次  
図版目次  
挿図目次

## 本 文 目 次

第1章 調査地区の位置と環境	1
第2章 調査概要	3
1. 沢城跡の調査	3
はじめに	3
検出遺構	4
出土遺物	9
ま と め	13
2. 地蔵堂廃寺跡の調査	14
はじめに	14
検出遺構	15
出土遺物	20
ま と め	24

出土遺物観察表

## 図版目次

- 図版1 沢城跡 第1調査地区  
(1)東西トレンチ全景  
(2)同 上
- 図版2 沢城跡 第1調査地区  
(1)南北トレンチ全景  
(2)同 上
- 図版3 沢城跡 第1調査地区出土遺物
- 図版4 沢城跡 第1調査地区出土遺物
- 図版5 沢城跡 第1調査地区出土遺物
- 図版6 沢城跡 第1調査地区出土遺物
- 図版7 沢城跡 第2調査地区  
(1)A区SD-1~3全景  
(2)同 上
- 図版8 沢城跡 第2調査地区  
(1)A区SD-4  
(2)同 上 土層断面
- 図版9 沢城跡 第2調査地区  
(1)B区全景  
(2)同 上 SD-2全景
- 図版10 沢城跡 第2調査地区  
(1)C区全景  
(2)同 上
- 図版11 沢城跡 第2調査地区出土遺物
- 図版12 沢城跡 第3調査地区  
(1)調査区全景  
(2)同 上 分部
- 図版13 地藏堂廃寺跡  
(1)第2調査区上層遺構全景  
(2)同 上 部分
- 図版14 地藏堂廃寺跡  
(1)第2調査区下層遺構全景  
(2)同 上
- 図版15 地藏堂廃寺跡  
(1)第2調査区SD-85301全景  
(2)同 上
- 図版16 地藏堂廃寺跡  
(1)第2調査区SD-85302全景  
(2)同 上 土層断面
- 図版17 地藏堂廃寺跡  
(1)第2・3調査区2号墳周濠全景  
(2)同 上 土層断面
- 図版18 地藏堂廃寺跡  
(1)第1調査区上層SB-85301全景  
(2)同 上 下層1号墳周濠全景
- 図版19 地藏堂廃寺跡  
(1)第1調査区1号墳周濠全景  
(2)同 上
- 図版20 地藏堂廃寺跡  
(1)第1調査区1号墳周濠遺物検出状況  
(2)同 上 土層断面
- 図版21 地藏堂廃寺跡  
(1)第1調査区1号墳周濠完掘状況  
(2)同 上
- 図版22 地藏堂廃寺跡 出土遺物
- 図版23 地藏堂廃寺跡 出土遺物
- 図版24 地藏堂廃寺跡 出土遺物

## 挿図目次

- 第1図 貝塚市遺跡分布図
- 第2図 調査位置図
- 第3図 第1調査地区、調査区域図
- 第4図 第2調査地区、調査区域図
- 第5図 第2調査地区、A・B区遺構平面図
- 第6図 第2調査地区、土層断面図(A区北壁)
- 第7図 第3調査地区、調査区域図
- 第8図 第3調査地区、遺構平面図
- 第9図 第3調査地区、土層断面図(南壁)
- 第10図 第1調査地区、遺物実測図
- 第11図 第1調査地区、遺物実測図
- 第12図 第2調査地区、遺物実測図
- 第13図 調査位置図
- 第14図 調査区域図
- 第15図 遺構平面図
- 第16図 遺物実測図
- 第17図 遺物実測図
- 第18図 遺物実測図

## 第1章 調査地区の位置と環境

本年度の発掘調査実施箇所のうち、本報告に掲載しているのは沢城跡並びにその近接として、第1・第2・第3調査区の3箇所、および貝塚市地蔵堂地内に位置する地蔵堂廃寺跡の一角である。

沢城跡は貝塚市をほぼ縦断する近木川と泉佐野市との境をなす、見出川とに挟まれた海拔約8～11mの地点に位置し、南海本線二色ノ浜駅のすぐ西側、旧国道26号線を挟んで広がる中世の城跡である。

遺跡は東西約400m、南北300mの範囲に広がっている。

周辺には古墳時代～中・近世にいたる遺物散布地でもあり、鎌倉時代を中心とする集落跡でもある澁池遺跡や平安時代の寺院跡と推定される廃明楽寺跡等が近接して存在しており、少なくとも古墳時代以降、人々の生活の場であったことをうかがわせている地域である。

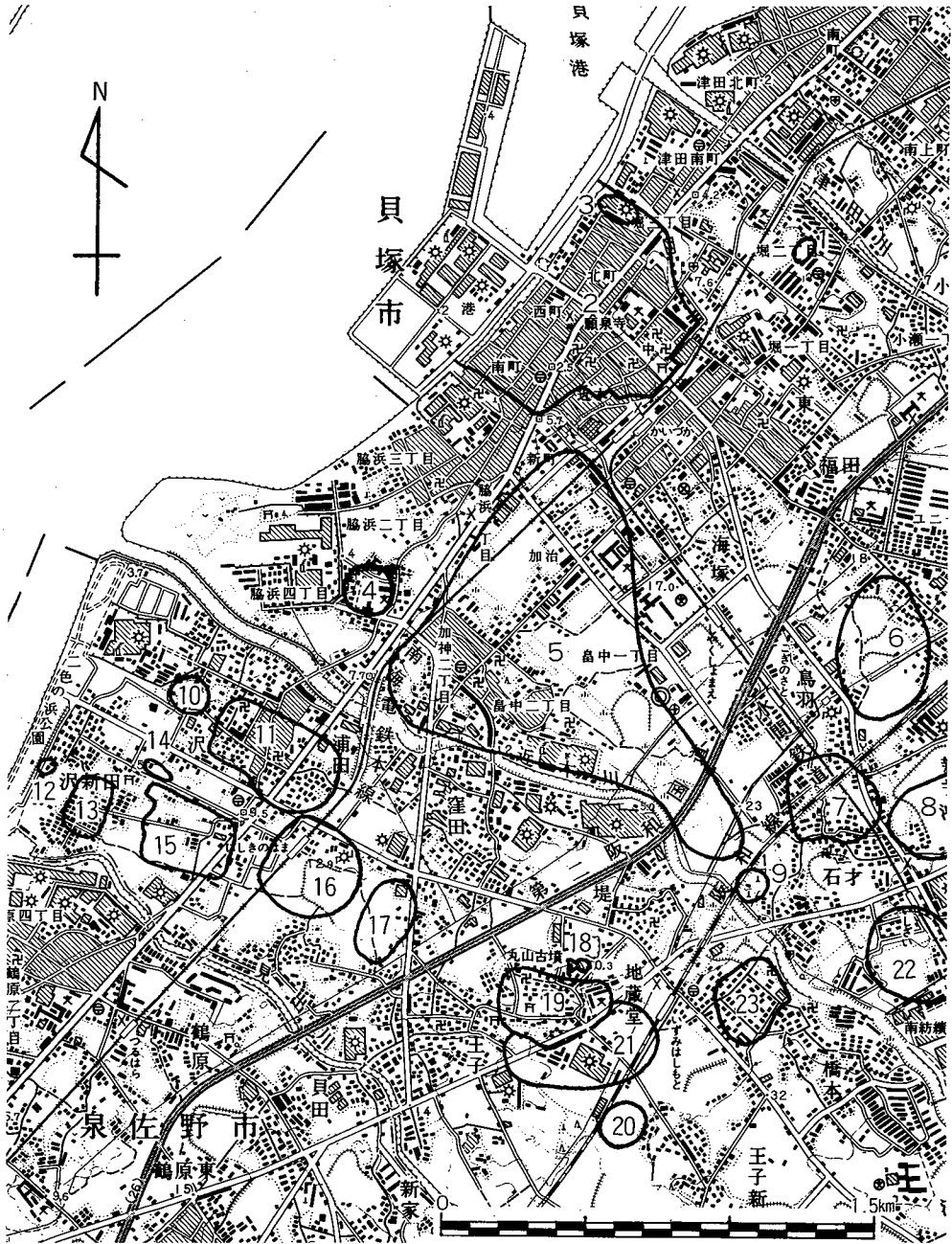
地蔵堂廃寺跡は沢城跡より1kmほど、内陸部に入った所に位置する遺跡であり、国鉄阪和線泉橋本駅の西方約300mに所在する。

遺跡は東西約400m、南北約250mの範囲に平安時代の寺院跡として広がっている。

遺跡の性格としては過去数度の発掘調査で、平安時代の寺院跡として広がる以外、古墳時代並びに中・近世の集落跡をも複合した遺跡であることがわかってきており、今回の調査でも古墳時代中期の小円墳の残骸や中世の掘立柱建物等が検出されている。

周辺に所在する遺跡としては、昭和58年度に新規発見となった中・近世の集落跡である王子遺跡がすぐ南側に広がり、また本市唯一の前方後円墳である丸山古墳(国指定史跡)が本遺跡に北接している。

このように、当地域は古くは古代より、中・近世に至るまで人々の生活や生産の場として発展していた地域である。



1. 堀遺跡    2. 貝塚寺内町    3. 泉州麻生塩壺出土地    4. 長樂寺跡    5. 加治・神前・畠中遺跡
6. 新井・鳥羽遺跡    7. 石才遺跡    8. 新井ノ池遺跡    9. 橋本遺跡    10. 沢共同墓地    11. 沢城跡
12. 沢遺跡    13. 沢海岸遺跡    14. 沢海岸北遺跡    15. 廃明樂寺跡    16. 澱池遺跡    17. 窪田廃寺跡
18. 丸山古墳    19. 地藏堂廃寺跡    20. 下新出遺跡    21. 王子遺跡    22. 石才南遺跡    23. 積善寺城跡

第1図 貝塚市遺跡分布図 (1 : 25,000)

## 第2章 調査概要

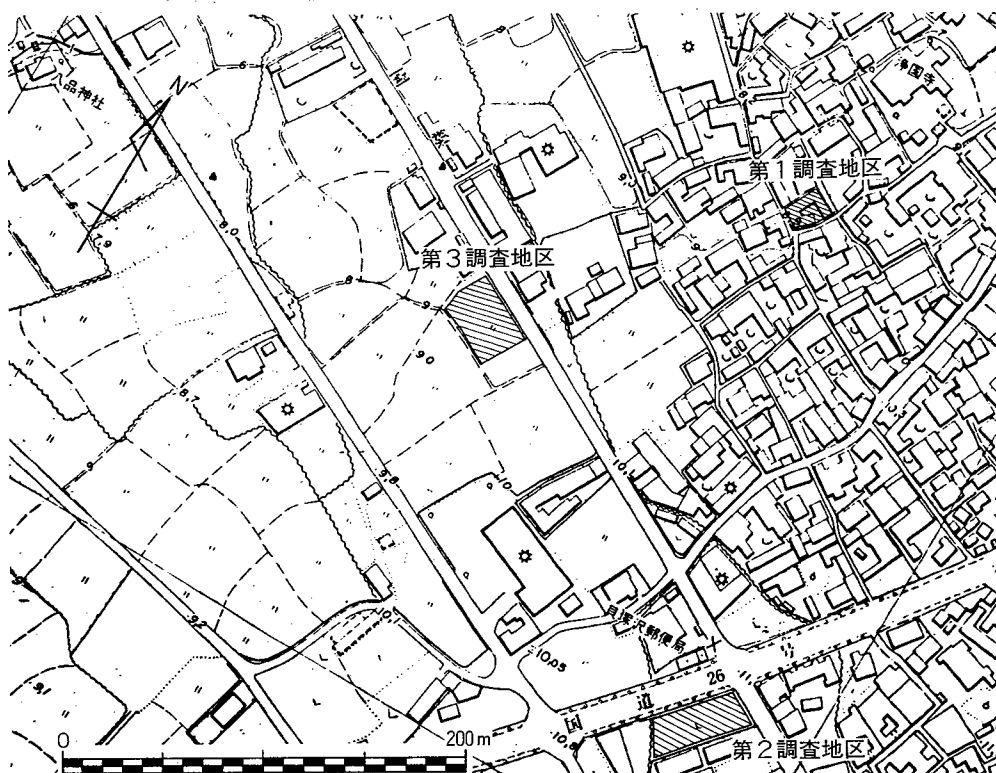
### 1. 沢城跡の調査

はじめに

今回の調査は先にもふれたように3箇所の調査地区を設けて実施した、その調査概要を記している。

調査地区は第2図に示すように、それぞれ第1・第2・第3の調査地区である。

第1調査地区は、敷地内にトレンチ調査区としてL字形に幅約2m、総延長約17.5mで総調査面積約35m<sup>2</sup>を設定したが、建築物の基礎深度との関係上、調査深度は現地表面より約0.6m程度までとなり、遺物包含土層内での調査となった。



第2図 調査位置図

第2調査地区は、敷地内に幅約1.5m、長さ約22mおよび約12mのトレンチを設定し、発掘調査を実施した。一部遺構の検出を見たことから、さらに部分的な拡張区を設定し、発掘調査を実施していった。



第3調査地区については、幅約1.5m、長さ約6.5mのトレンチを敷地内に1箇所設定し、発掘調査を実施していった。以下、第1・2・3調査地区の結果について、各々の概要を記すことにする。

#### 検出遺構

第1調査地区の基本土層は、現地表面下約0.2～0.3mの現代盛土があり、以下約0.2mの第2層暗灰色泥砂および約0.2mの第3層灰色粘質土の存在が認められた。しかし、それらはいずれも遺物包含土層であり、遺構の検出までには至らなかった。

第2調査地区の基本土層は現地表面が約0.15mの水田耕作土となっており、以下約0.1mの第2層黄橙色砂質シルト、0.15～0.2mの第3層灰色砂質シルトおよび第4層暗茶褐色砂質シルトが薄く約0.05mの厚さで順次堆積している。

検出遺構は第4層暗茶褐色砂質シルトを除去したのちに、地山面に切り込む形で検出した。

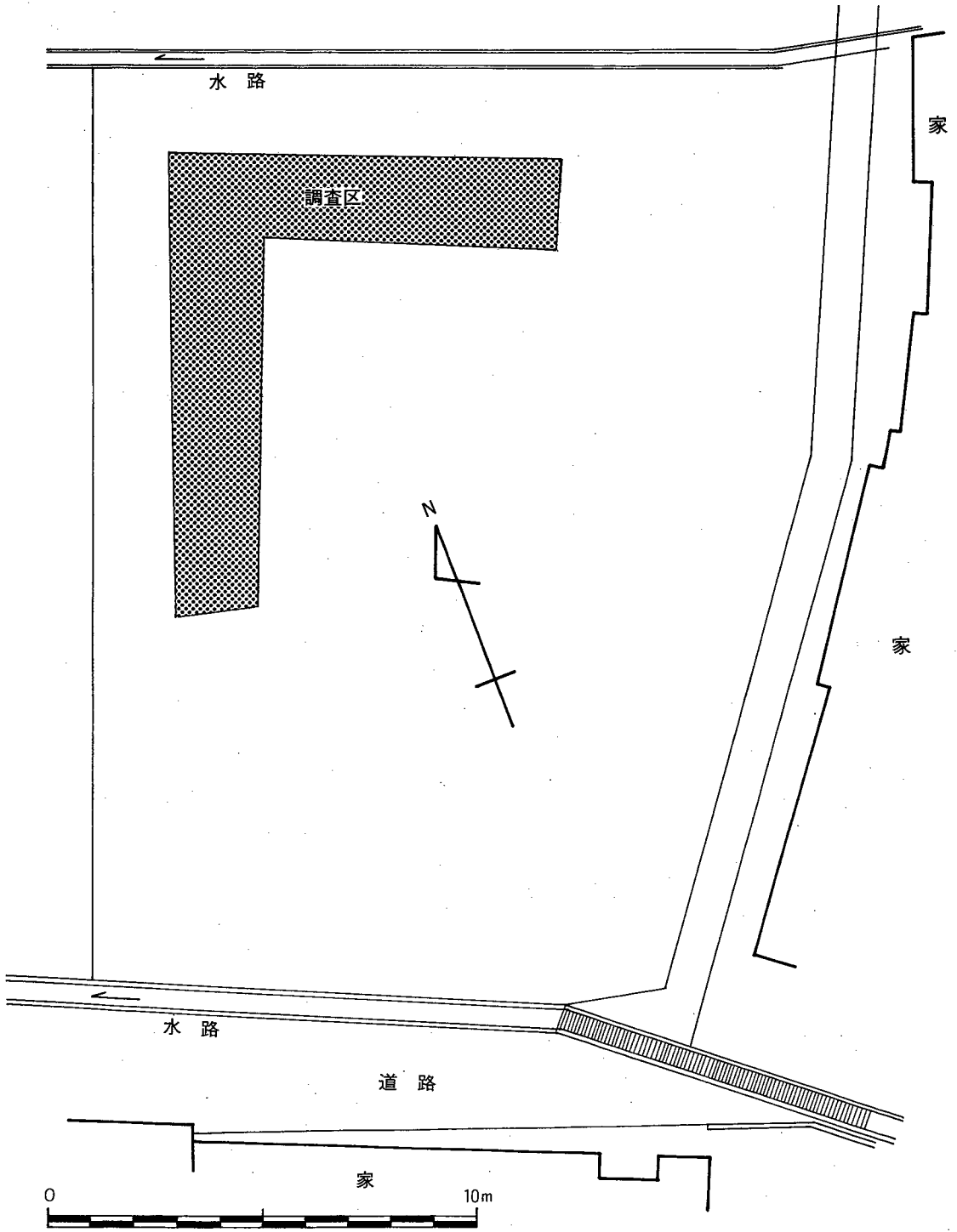
遺構としては、A区内において溝状遺構4条およびB区内において溝状遺構1条および落ち込み状遺構1箇所を検出した。

A区内の検出遺構のうち、3条の溝は1箇所に切り合い関係を有して検出している。そのため規模等、全容の把握はやや不明瞭なものであるが、それらはすべて時期的差異を有するものであり、順次SD-3→SD-2→SD-1と新しくなる。それぞれの規模としては、SD-1は幅1.7～2.5m、深さ約0.2～0.3m程度を測り、溝内埋土は若干の砂層も認められるが、茶褐色シルト～灰黄色シルトが埋土となる。SD-2はSD-1により切られているものの、幅1.2～2.5m、深さは約0.3mほどであるが溝の肩部はかなり崩れた状況となっている。SD-3はSD-1およびSD-2によってほとんど破壊されており、その痕跡状況のみの検出である。流水方向はSD-1およびSD-2がそれぞれ南東方向より北西方向に流れるのに対し、若干、東側より西側に向かって流れをみる溝である。規模としてはやや不明瞭であるが、幅約1m程度を測るものと思われる。

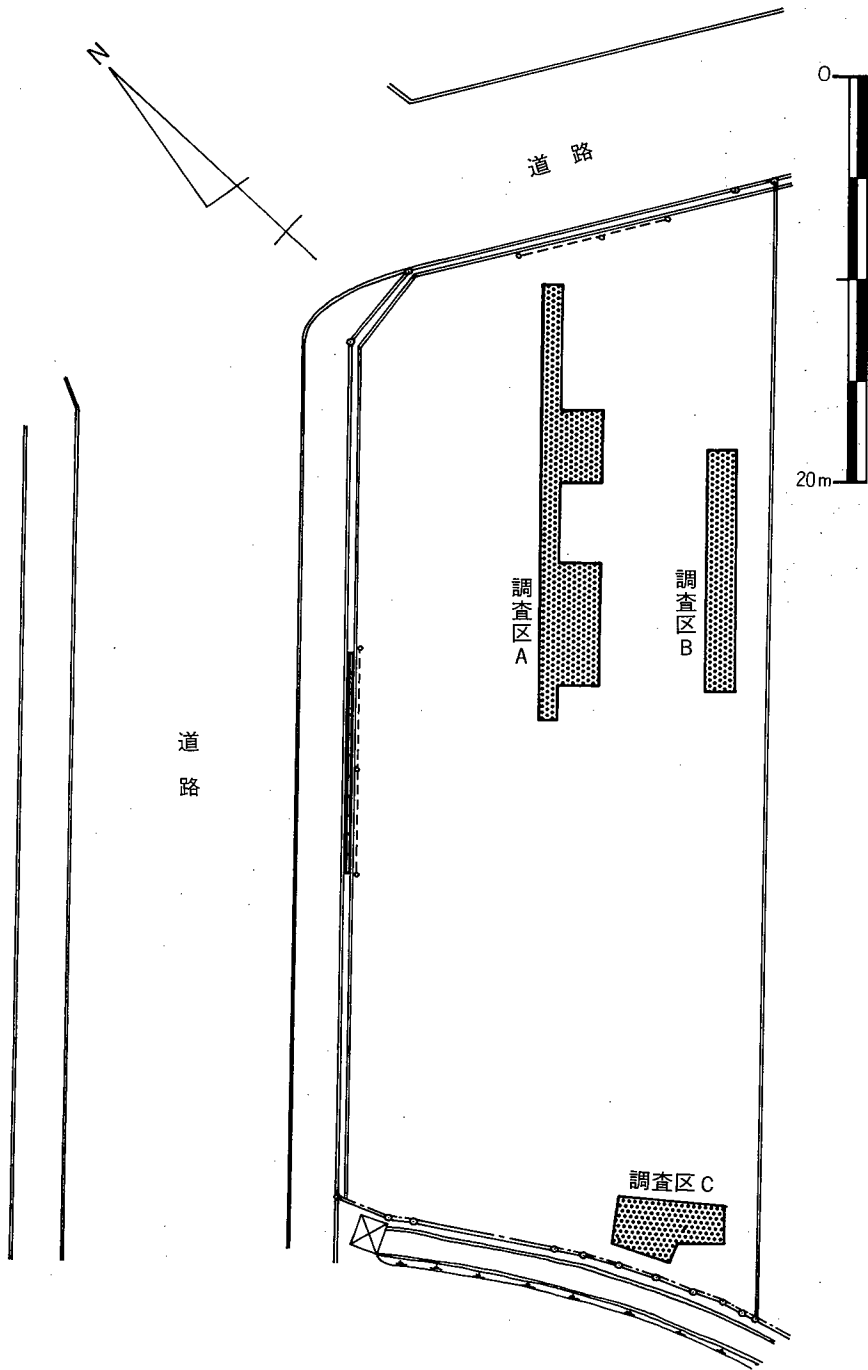
SD-4は上記の溝状遺構群の北東部で検出したものであり、幅約0.7m、深さ約0.2mを測り、流水方向としては南南東より北北西に向かって流れをもつ溝である。

B区ではA区SD-2の続きが検出されたものの、その他SD-1あるいはSD-4は検出されなかった。また、SD-2を一部切り取るようにして、新しい落ち込み状遺構SX-1を検出している。

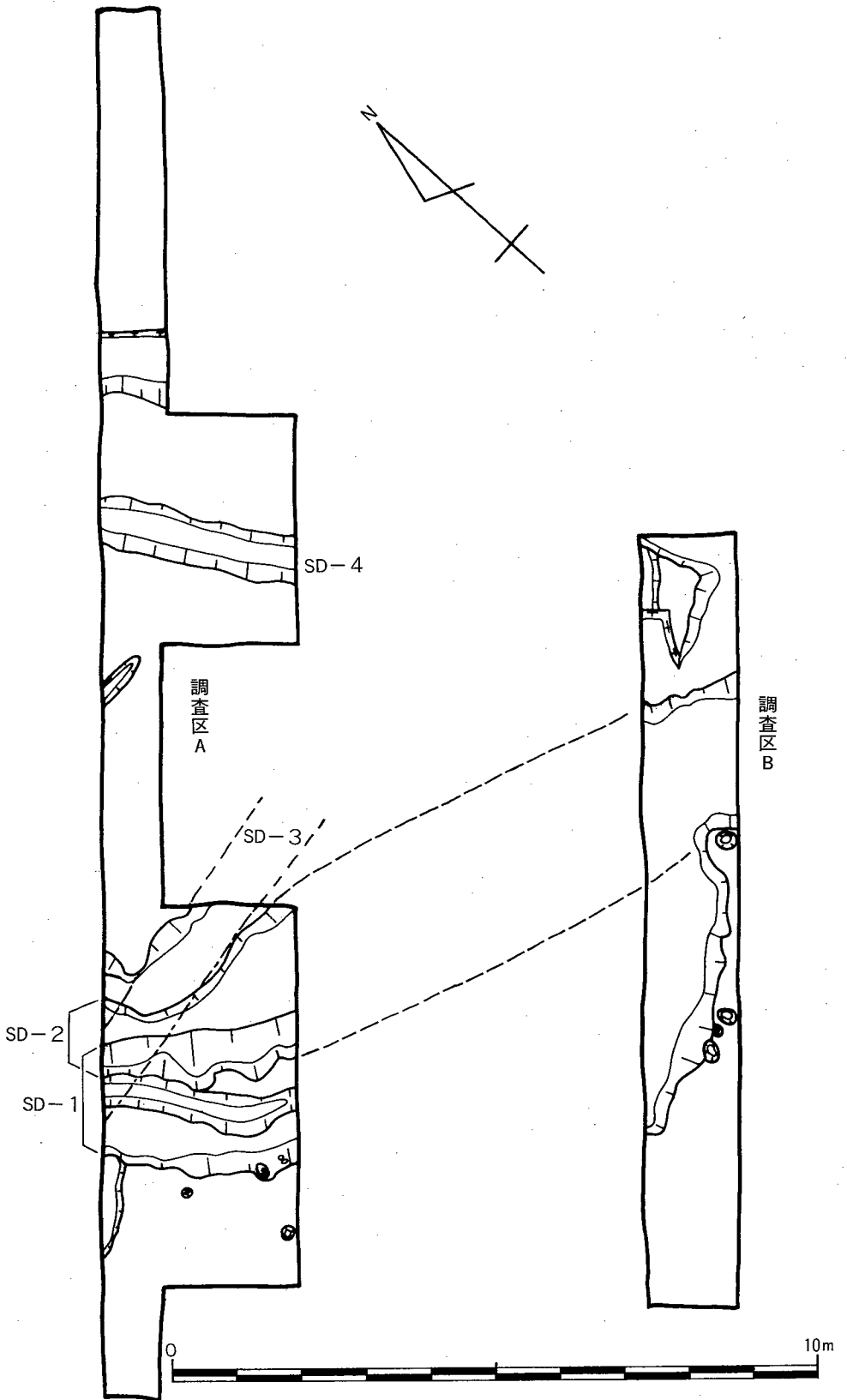
SX-1の規模としては、溝状になるものかあるいは円形の落ち込み状遺構となるかは



第3図 第1調査地区、調査区域図



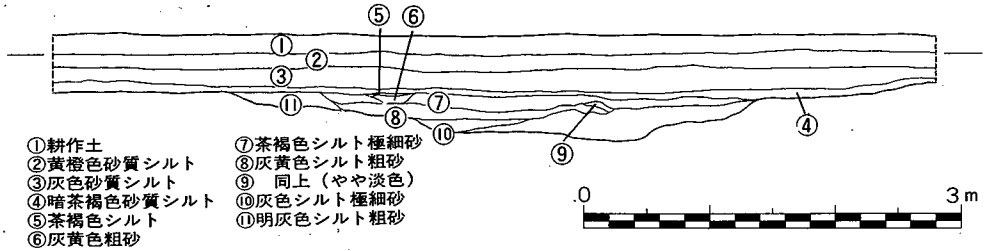
第4図 第2調査地区、調査区域図



第5図 第2調査地区、A・B区遺構平面図

不明であるが、検出面よりの最大深さは約0.3 mを測り得た。

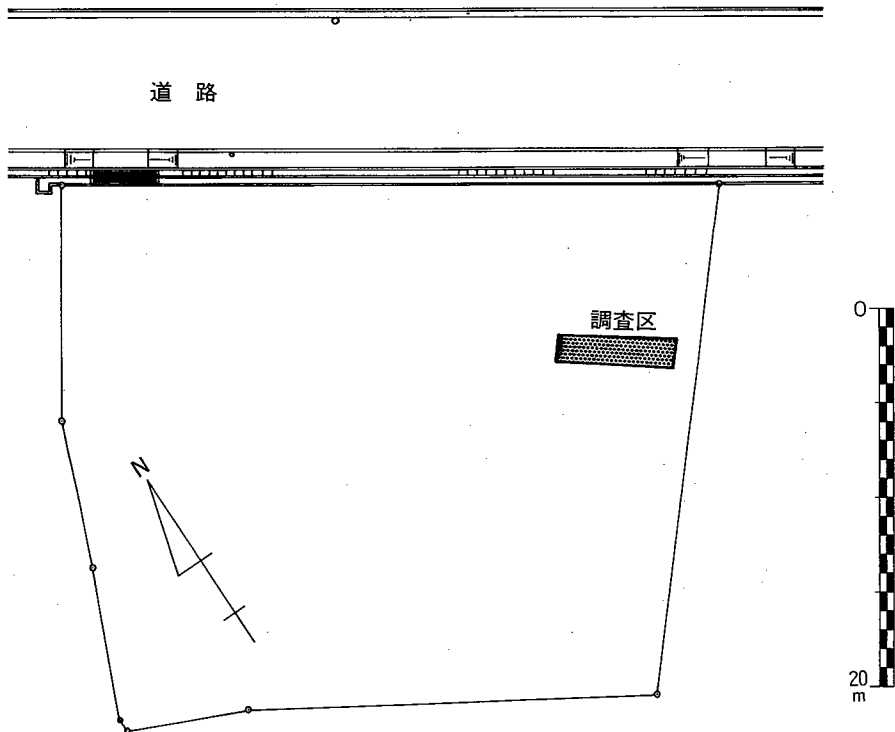
C区では基本土層がA・B区とは違い、約0.15m厚の第1層耕作土下で第2層黄橙色砂質シルトが約0.05m程度堆積しているが、その下で地山面に達する。



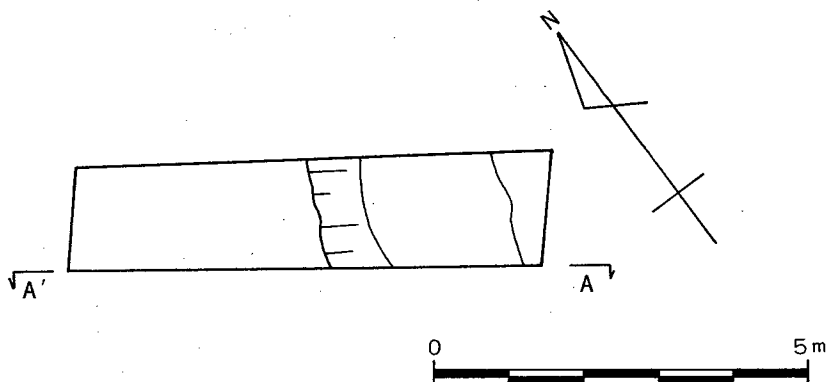
第6図 第2調査地区、土層断面図(A区北壁)

検出遺構としては、性格不明の極浅い落ち込み状遺構等を数箇所検出したのみである。

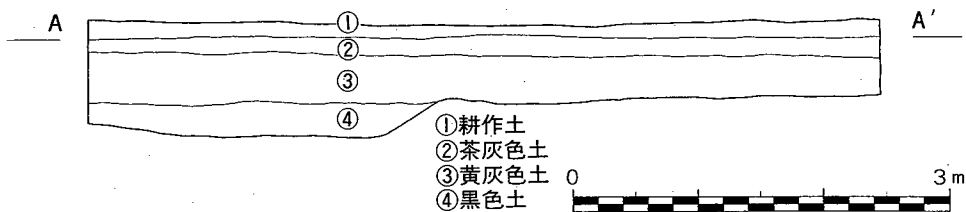
第3調査地区の基本土層は、0.1~0.15mの第1層耕作土、および約0.15mの第2層茶灰色土、約0.3mの第3層黄灰色土の堆積状況となり、以下地山面に達する。検出遺構としては、地山検出面より切り込む形で溝状遺構かと考えられる落ち込み状遺構を検出している。遺構の規模としては、検出面からの最大深さ約0.3mを測る。断面形は浅いややU字形を



第7図 第3調査地区、調査区域図



第8図 第3調査地区、遺構平面図



第9図 第3調査地区、土層断面図(南壁)

呈するものの幅については調査区外へ延び不明確であるが、おおむね3.5m程度と思われる。遺構内埋土は黒色土層がほぼ全域に堆積し、底部の一部に若干の砂礫層が薄く堆積する。

遺構の性格については不明確であるが、南南西方向から北北東方向に流水方向をもつ溝状遺構かと考えられる。時期としては、遺構内よりの出土遺物が無く不明である。その他の出土遺物としては、第3層黄灰色土層内より瓦片、土師器片および須恵器片を極少量検出しているが、それらはすべて時期決定並びに図示に絶え得るものではなかった。

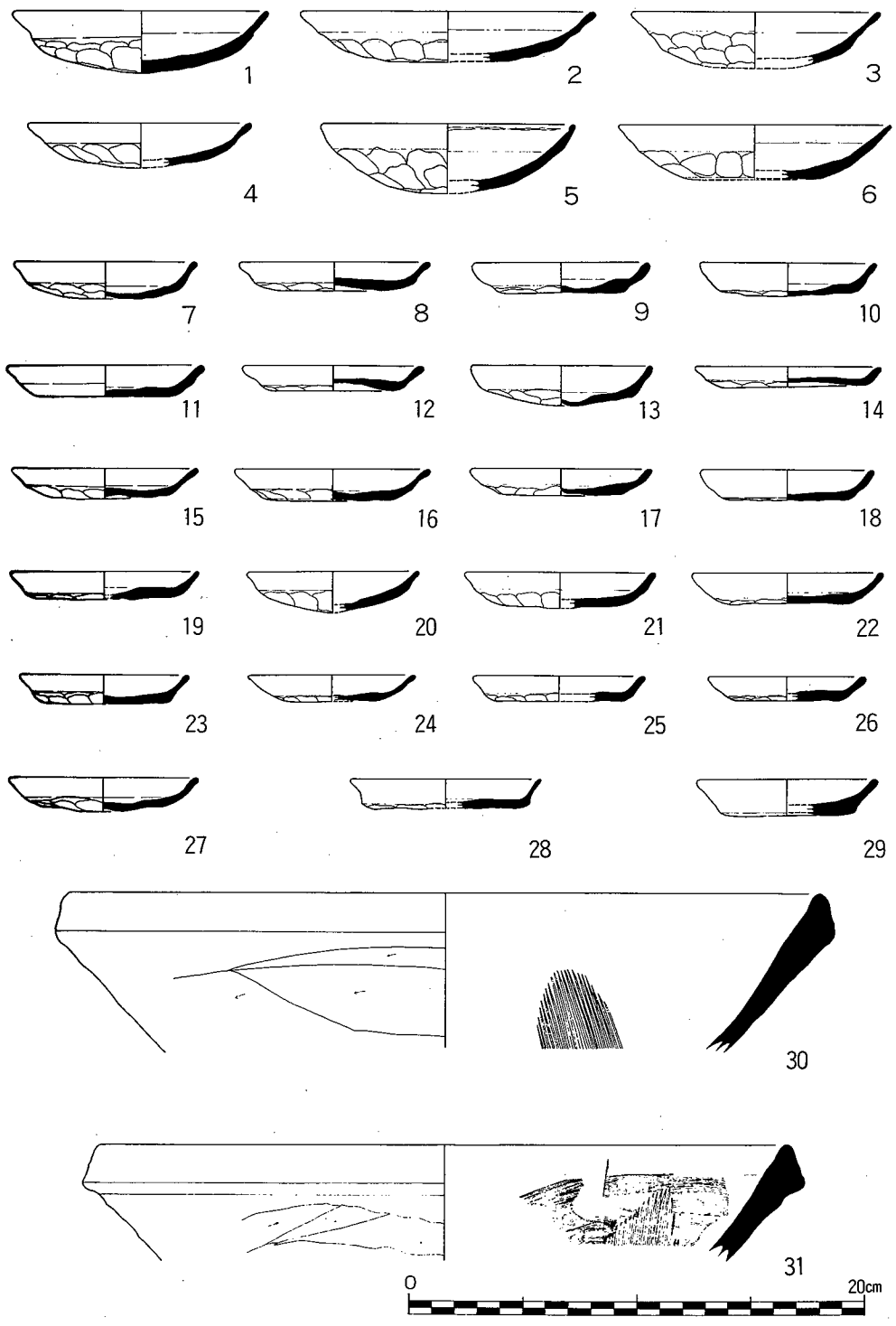
#### 出土遺物

第1調査地区の出土遺物はすべて第2層および第3層の遺物包含土層内からである。

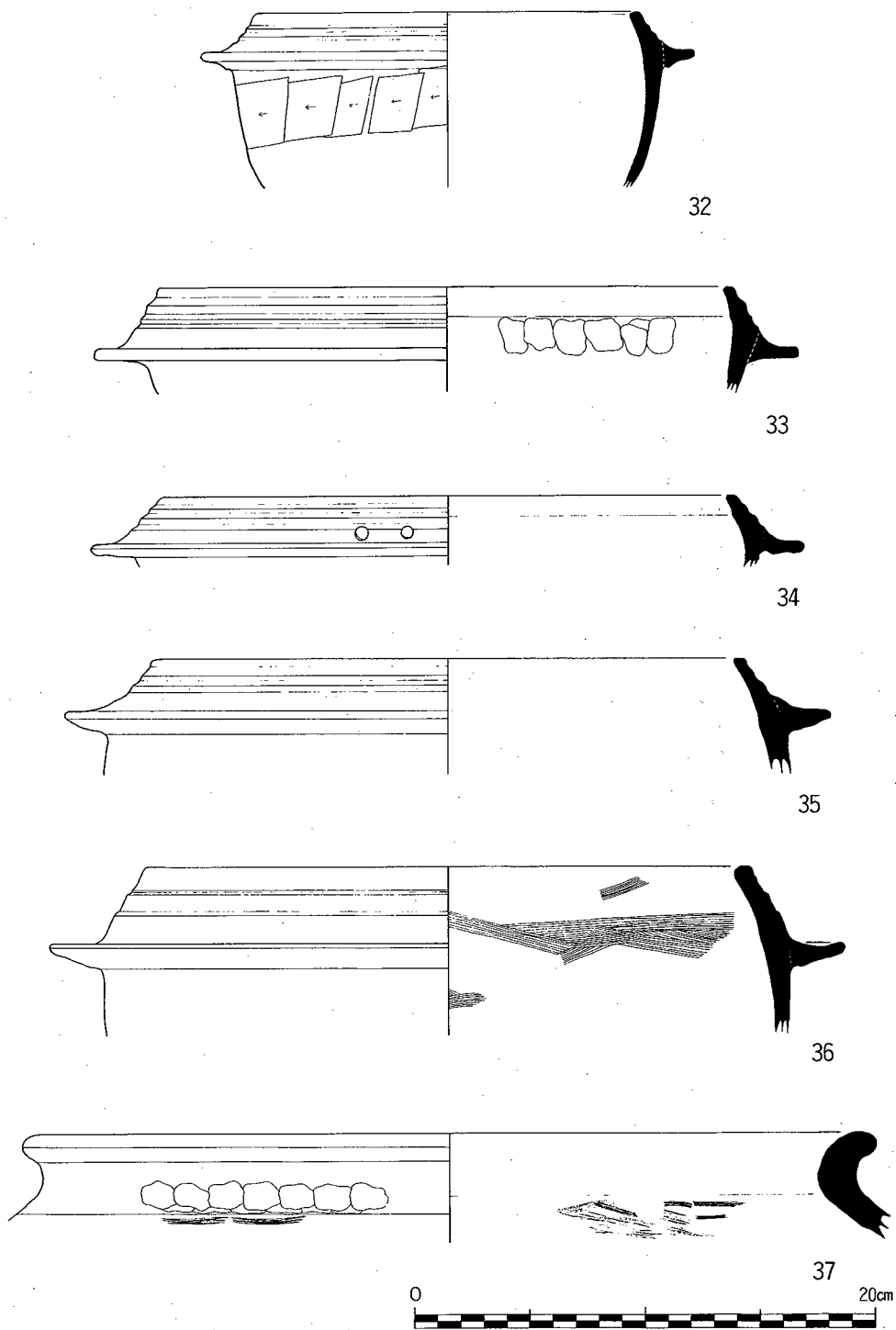
種別は第10・11図等に図示しているように瓦器碗(1～4)、土師器皿(5・6)、土師器小皿(7～29)、播鉢(30・31)、瓦質羽釜(32～36)、瓦質甕(37)、土錘(38～45)等である。

時期としては、出土地点がすべて遺物包含土層内からという欠点はあるが、おおむね瓦器碗の形態等により、その終末期のものと考えられ、14世紀末～15世紀前半にかけてのものであろう。その他瓦器碗以外の出土遺物についてもあまり大差のない時期のものと考えられる。

第2調査地区の出土遺物についても、遺構内からの出土は確認できず、今回図示したも

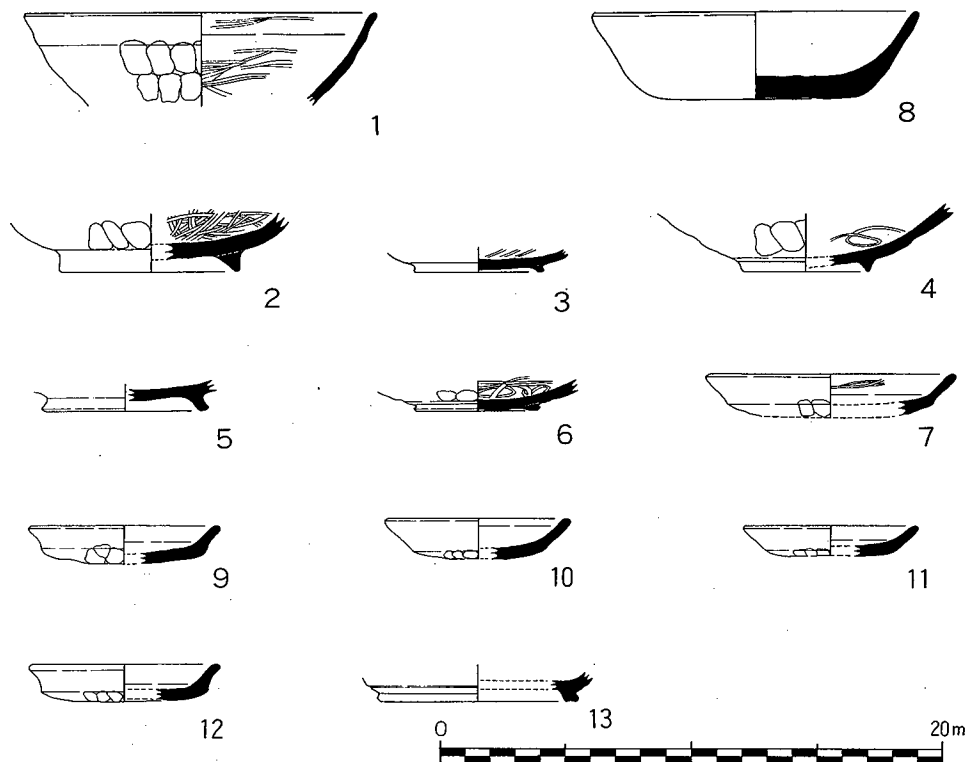


第10図 第1調査地区、遺物実測図



第11図 第1調査地区、遺物実測図





第12図 第2調査地区、遺物実測図

のはすべて第2・第3遺物包含土層内よりの出土である。

種別は瓦器碗(1～6)、瓦器小皿(7)、土師器大皿(8)、土師器小皿(9～12)および須恵器坏身(13)、白磁碗(14)等の小破片である。

以下、個々の遺物の詳細については後述の観察表にまとめて記述することにする。

## ま と め

今回の調査において調査区の面積的制約の中ではあるものの、幾多の調査成果が得られたと考えられる。ただ、検出遺構並びに出土遺物の希薄さは免れないにしてもであるが。

第1調査区では本遺跡のほぼ中心部という立地下であったことから、遺構の検出までには至らなかったものの、その遺物の出土量としては、一部包含土層中であるとはいえ、ほぼ一時期あるいはさほど差異のない単一時期と考えられる土器片が多く出土している。

出土遺物から、14世紀末～15世紀前半と考えられる人々の生活の中心的位置であったように思われる。

また、土器編年上、瓦器碗の最終段階として位置づけられる遺物が出土したことは、同時に出土している他の土器群との比較検討資料として、今後の土器研究の上に充分役立つ資料である。

第2・第3調査地区では、溝状遺構等が出土しているもののそれら各遺構内からはまったく遺物が検出されず、遺構の時期を不明確なものにしている。

上層よりの出土遺物からみた場合、中世期の遺構あるいは若干古い時期の遺構かとも考えられる。また、検出された溝の性格についても、今後周辺地域の調査の進行に伴い、資料の蓄積とともにいずれは把握されるものと思われる。

一応、今回の調査地は当遺跡の中心部からはかなり隔たった地区であるところから、その生産的場所ではないかと考えられ、また過去における条里制等の土地区画に何らかの制約を受けている溝方向性をもつものではないかと考えられる。

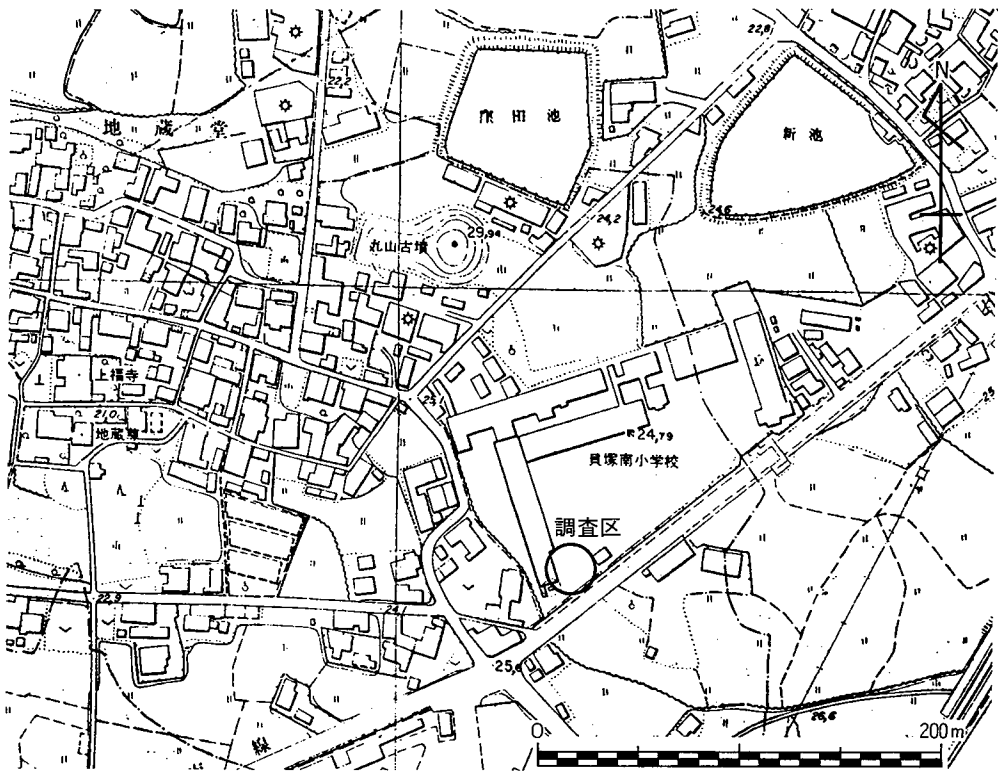
## 2. 地蔵堂廃寺跡の調査

はじめに

今回、調査を実施したのは、地蔵堂廃寺跡の西端部にあたる市立南小学校敷地内の校庭部分の一角である。

調査地区は、昭和56年度に発掘調査を実施して、中世掘立柱建物・井戸等とともに、古墳時代中期の古墳周濠の一部を検出したすぐ東側に接した位置である。

調査区の状況としては過去の結果から当初より、中世および古墳時代の遺構の存在が考慮されていたところである。



第13図 調査位置図

調査区の設定は、第1調査区として東西長8.5m、南北長6.5m、第2調査区として東西長6.5m、南北長9mの2箇所のグリッドを設定した。

調査の進行途中において、一部中世掘立柱建物1棟を検出したため、その建物規模を把握することを目的に最小限の拡張区を第1・第2調査区をつなぐ形で幅約1.5m、長さ約5.5mの第3調査区としてのトレンチを設定し、調査を実施していった。

調査の結果は、中世掘立柱建物およびそれと大差のない時期と考えられる溝状遺構等を検出するとともに、その下層遺構として、古墳時代中期の円墳周濠を2箇所検出した。

それぞれの検出遺構の詳細については順次以下に記すことにする。

#### 検出遺構

基本土層としては、第1調査区および第2調査区では第2層以下の土層において差異が生じている。

第1調査区では、第1層人工盛土が0.05～0.15mの厚味で堆積し、以下約0.2m厚の第2層暗灰色土、約0.1mの第3層茶灰色土層となり、地山面に達する。ただ、第1調査区西方になるにしたがい、第2層が削り取られるように第1層人工盛土の堆積厚味が増している。

第2・第3調査区においても基本的には第1調査区と同様の土層堆積状況を見るが、第3層はほとんどなくなってしまふ。また、第2層より下層において、一部段を有する人工的な地下げが行われており、基本的には第3層より切り込む形で黄灰色土層が0.1～0.2mの厚味で認められ、以下地山面に達するとともに遺構の検出をみた。

検出遺構は大別すると2時期に分かれるもので、それも層位的にとらえられるものであった。

第2層検出後に認められる遺構群とさらにそれら各遺構のベースとなる第3層を除去したのち、地山面に達して検出をみる遺構とである。

#### 掘立柱建物

第1調査区から第3調査区に延びるものとして検出した遺構であり、さらに昭和56年度調査分で検出した柱穴にも延びていくものである。柱穴掘り方は径約0.35m程度の円形を呈するもので、建物方向は南北軸より約18°西方へ傾く。

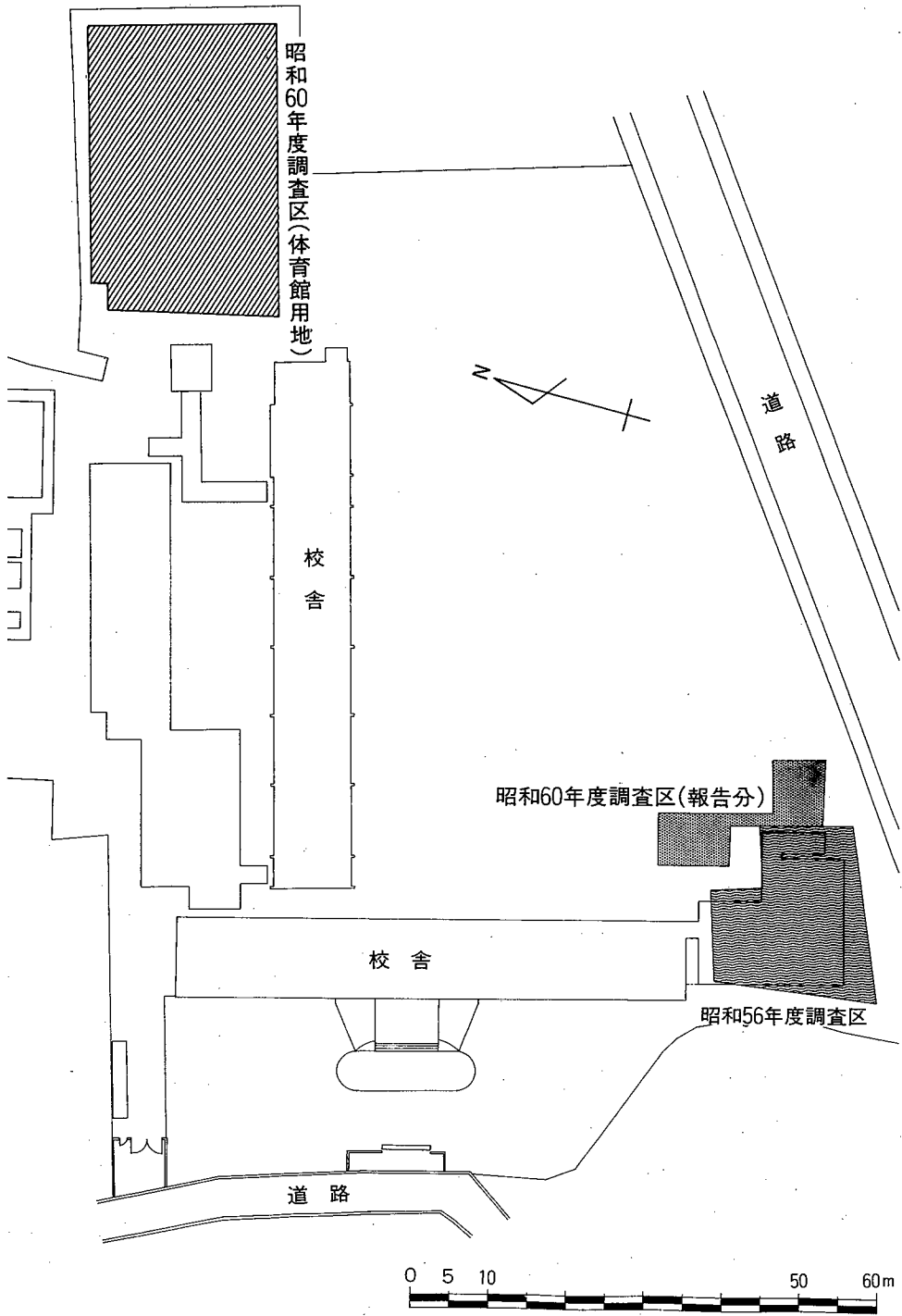
規模は、南北5間、東西5間で南北1.5×2.2×2.2×2.2×1.5mで計9.6m、東西1.6×1.9×1.9×1.9×1.6mで計8.9mである。

柱穴内からの出土遺物は瓦器片が少量出土しているが、図示等に耐え得るものではなかった。ただ、東側南北列の今回検出しているものとしては最も北側に位置する柱穴から、直径約10cm程度となった柱根が出土している。柱根の材質については不明である。

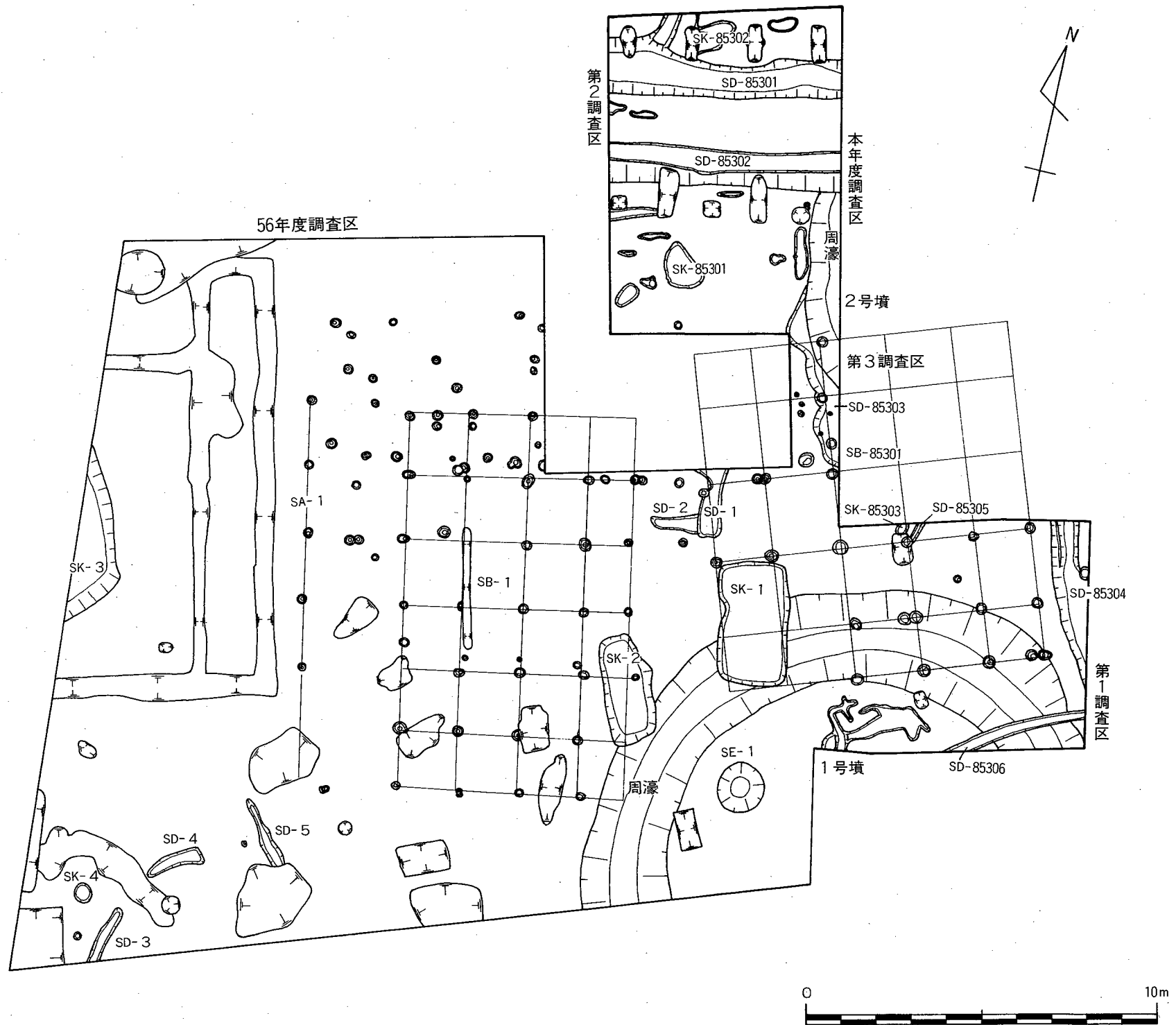
#### 溝状遺構

今回の調査で古墳以外の溝としては6条検出している。

第2調査区の段遺構の下で検出したS D-85301・85302はその段に平行して走る溝であり、それぞれの規模は幅0.9～1.6m、遺構検出面よりの深さ約0.1mおよび幅約0.6m、深さ約



第14図 調査区域図



第15図 遺構平面図

0.05 m程度である。流水方向は西方より東方へ流れている。段遺構およびこれらの溝状遺構の時期としては、出土遺物より14世紀後半～15世紀初頭頃かと考えられる。

さらに、この段遺構に切られるものとしてSD-85303がほぼ直行して南北に走っているが、その下層より古墳周濠が検出されているため、周濠が埋没したのちの窪地状の遺構かとも考えられる。規模としては、調査区外へ延びるため、幅は不明であるが深さ約0.2 m程度を測り得るとともに下層の古墳周濠の検出をみた。

第1調査区ではSD-85304～85306の3条をそれぞれ検出している。

SD-85304は調査区の東端で検出した溝であり、幅約0.8m、深さ約0.1m程度を有し、溝方向はややカーブするものの南北方向に走っている。SD-85306は調査区の南端で検出した溝であり、幅約0.3m、深さ約0.2m程度を測る。溝方向は東西方向に走っている。

時期的にはそれぞれ出土遺物より13世紀代のものと考えられる。

## 土 壙

第2調査区で段遺構の北側と南側でそれぞれ1基ずつ計2基を検出しているが、形状がかなり不揃いなうえ、検出面よりの深さもそれぞれ0.05～0.1m程度であり、その性格等については不明である。

## 古 墳

第1調査区のほぼ中央部で検出した1号墳と、第2・第3調査区の東壁に沿って検出した2号墳とである。

1号墳周濠は、昭和56年度の調査によって検出した溝の延長である。規模は円形にめぐり、幅約3m、遺構検出面よりの深さ約0.45m程度を測り、緩やかなU字形を呈している。また、周濠の最底部よりほぼ全域に渡って土器片が多量に出土しており、それも人為的に細かく破壊して投棄したかのような出土状況であった。

前回調査分の周濠規模と合わせて、古墳の規模を復元すると、溝の内法で直径約11m程度を測り、溝幅をも含めた直径は17～18mと考えられる。なお、墳丘部についてはすべて削平を受けていたため墳丘盛土すら残存していなかった。

2号墳周濠は、第2・第3調査区の東壁に沿って検出したものであるが、検出部分が極めて少なく全容を把握できるまでには至っていない。検出し得た規模としては深さ約0.4m程度を測り得ただけである。全体としては、1号墳と同程度の規模を有する古墳かと考えられる。なお、この周濠検出時において黒色土器(土器番号17)を検出しており、当古墳の破壊埋没が平安時代には行われていたと思われる。

## 出土遺物

1号墳周濠内からの出土遺物としては、すべて須恵器片である。出土状況としては、周濠内の底面ほぼ全面に、それも細かく人為的に打ち砕いて投棄したような状況であった。

器種としては、須恵器蓋5点(1～5)、高坏脚部片1点(8)、有蓋高坏4点(9～12)、無蓋高坏1点(13)、甕1点(14)、台付有蓋短頸壺1点(15)、器台1点(16)等である。

時期は、おおむね5世紀後半～末頃のものと考えられる。

2号墳周濠内からの出土遺物は、今回の調査ではまったく検出をみなかったため、古墳の時期を確定するまでには至らなかった。

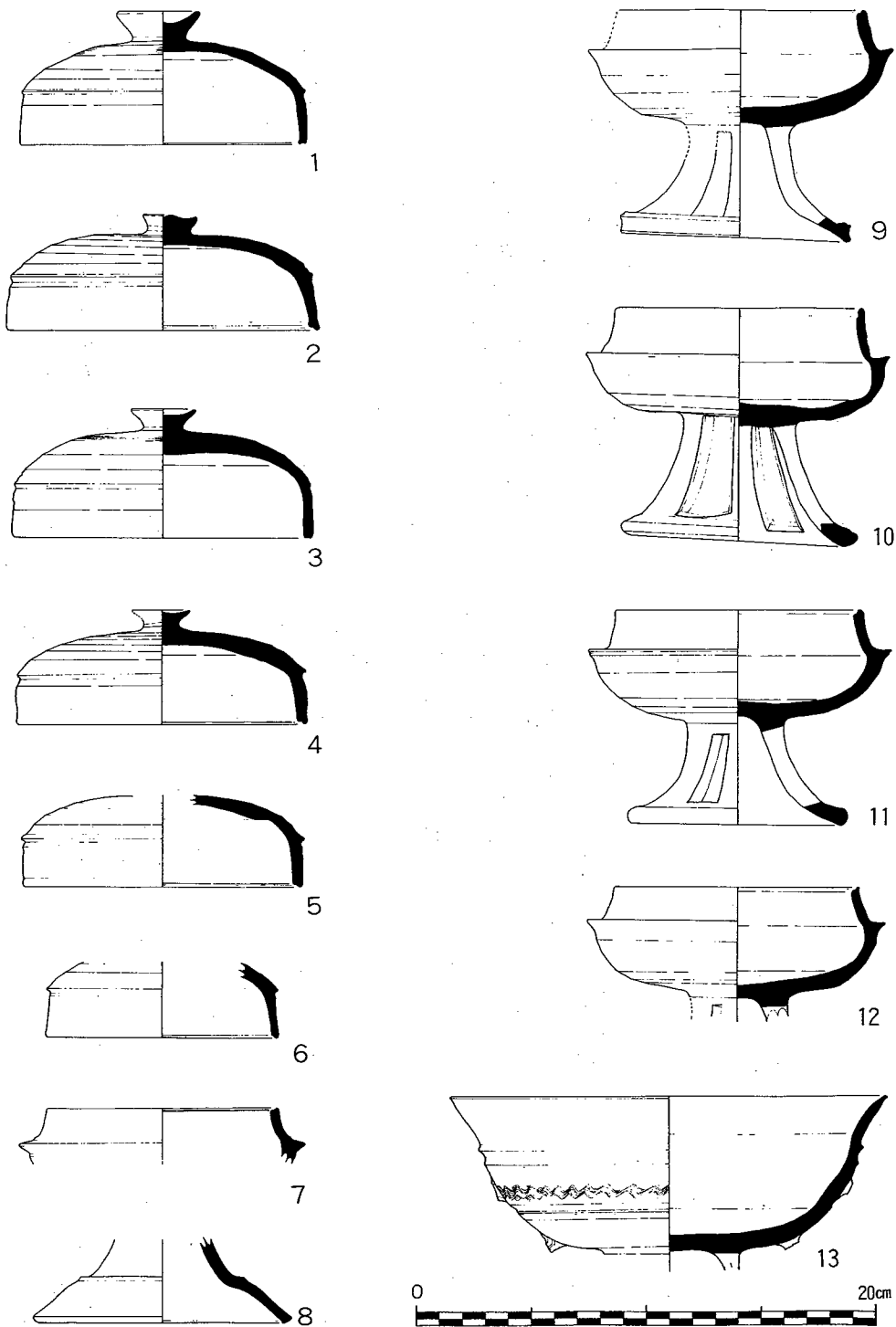
その他の出土遺物として、今回図示しているのはほとんど遺物包含土層中でのものであるが、黒色土器(17)は2号墳周濠検出に際して出土したものであり、また瓦器小塊(23)についてはSD-85301内より出土。瓦器塊(18)についてはSD-85303内において出土したものである。

図示に耐え得るものとして今回報告しているのは、第18図および図版24に記載しているものである。

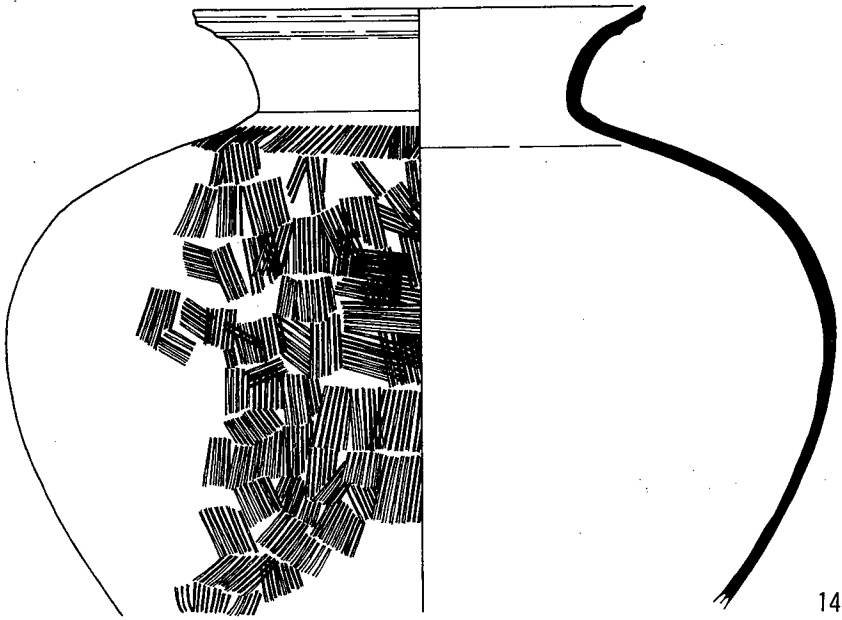
器種としては、黒色土器1点(17)、瓦器塊5点(18～22)、瓦器小塊1点(23)、瓦器小皿1点(24)、土師器小皿5点(25～29)、土師質土錘1点(30)である。

以下、個々の遺物の詳細については、後述の遺物観察表にまとめて記述する。

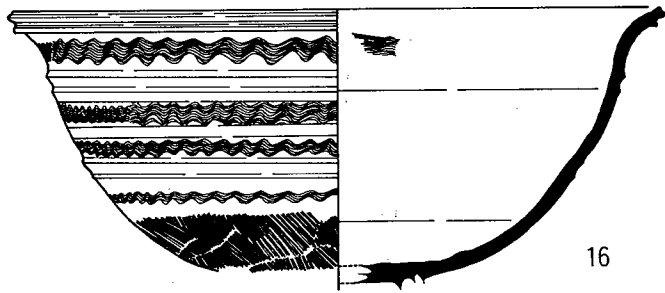




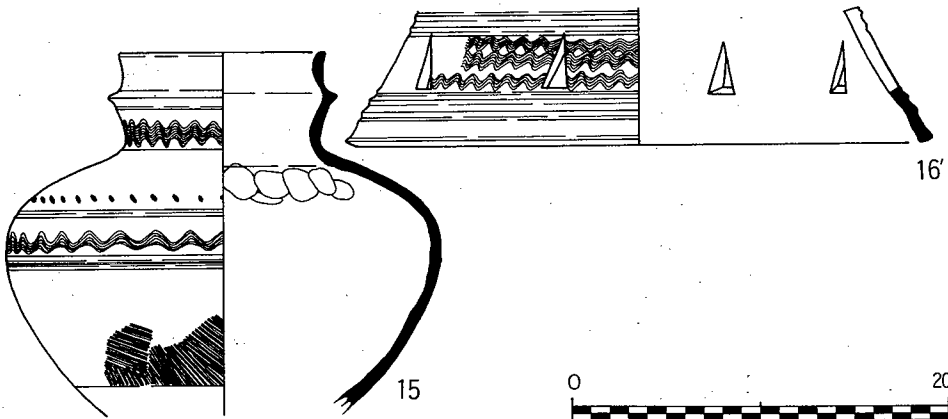
第16图 遺物実測図



14

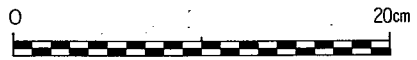


16

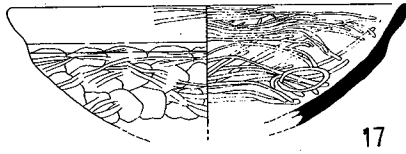


15

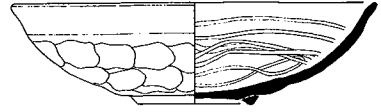
16'



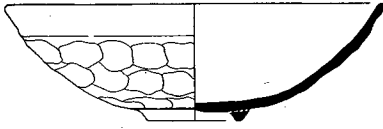
第17図 遺物実測図



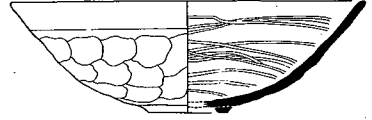
17



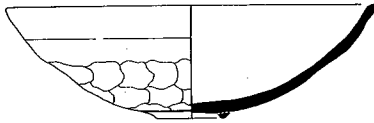
18



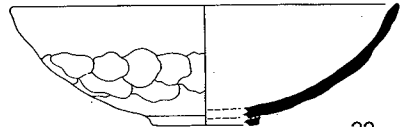
19



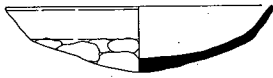
20



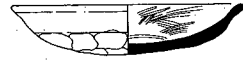
21



22



23



24



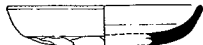
25



26



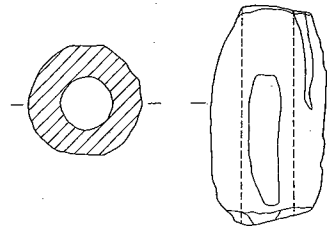
27



28



29



30



第18図 遺物実測図

## まとめ

今回の調査の成果としては、5世紀後半～末頃と考えられる古墳の存在が2基確認されたことと、その古墳を完全に破壊し、古墳の存在すら知らないといった状況で掘立柱建物やその他溝状遺構等を多数検出したことである。これらの時期的考察については、各遺構内からの出土遺物が希薄であることからやや不明瞭といわざるを得ないものであるが、数少ない遺構内出土遺物とともに上層の遺物包含土層よりの出土遺物等からみた場合、第1調査区の段遺構に伴う各遺構群の時期としては14世紀後半～15世紀初頭と考えられ、その他の遺構については13世紀～14世紀代にかけてのものと考えられる。また、掘立柱建物については、かつて昭和56年度の発掘調査で検出した掘立柱建物とは建物方向性に差が認められるため、若干の時期差があるものと思われる。

古墳時代の当地域の性格を考える上において、今回の調査では円墳と考えられる古墳が2基確認され、また本年度の当小学校の体育館建て替え工事に際して方墳を1基確認したことは、古墳時代における当地域が古代地方豪族の墓域的性格を有する地区と考えるにたるものであろう。また、当地域の北方には国指定史跡の前方後円墳である丸山古墳が位置しており、少なくともこの丸山古墳を中心とした5世紀代における一古墳群の存在する地域であると考えられる。ただ、これら古墳群に伴う当時の生活地域あるいは生産地域については、今までのところ明確にはされていないが、今後周辺地域の調査の進行とともにそれらも徐々に解明されるものと思われる。

## 出土遺物観察表

種類	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓦器小碗	10-1	口径：11.0 器高：2.7	底部は丸味をもち、口縁部は短く外反する。	口縁部は横方向のナデ調整、外面体部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：炭素吸着はみられない 色調：灰黄色
瓦器小碗	10-2	口径：12.8		口縁部は横方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 口縁部残存： $\frac{1}{4}$ 反転復元
瓦器小碗	10-3	口径：10.8		口縁部は横方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰白色 口縁部残存： $\frac{1}{4}$ 反転復元
瓦器小碗	10-4	口径：9.7	体部は緩やかな丸味をもち、口縁部は短く外反する。	口縁部は横方向のナデ調整、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：炭素吸着はみられない 色調：灰白色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
土師器皿	10-5	口径：11.0	口縁端部が内面でわずかに肥厚する。	口縁部は横方向のナデ調整、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：白色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
土師器皿	10-6	口径：11.8		口縁部は横方向のナデ調整、外面体部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：白色 反転復元
土師器小皿	10-7	口径：7.8 器高：1.7	底部は平坦で、口縁部は短く外反する。	口縁部は横方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：橙色
土師器小皿	10-8	口径：8.2 器高：1.3	底部は平坦で、口縁部は短く外反する。	口縁部は横方向のナデ調整、外面体部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：淡橙色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
土師器小皿	10-9	口径：7.5 器高：1.3	底部は平坦で、口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部は横方向のナデ調整、外面体部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：橙色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元

種類	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器小皿	10-10	口径：7.6 器高：1.5	底部は平坦で、口縁部は外上方に直線的に立ち上がる。	口縁部、内面底部 $\frac{1}{2}$ 横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：橙色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$
土師器小皿	10-11	口径：8.4 器高：1.4	底部は平坦で、口縁部は外上方にわずかに外反し立ち上がる。	口縁部、内面底部 $\frac{1}{2}$ 横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：淡橙色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
土師器小皿	10-12	口径：7.8 器高：1.1	底部は上げ底風で、口縁部は短く外反する。	口縁部は横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、内面底部は不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：淡橙色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$
土師器小皿	10-13	口径：7.8 器高：1.7	比較的平坦な底部で、口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部、内面底部 $\frac{1}{2}$ 横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：淡橙色
土師器小皿	10-14	口径：8.0 器高：0.9	底部は上げ底風で、口縁部は短く外反する。	口縁部は横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：淡橙色
土師器小皿	10-15	口径：8.0 器高：1.4	底部は平坦で、口縁部は外上方へ外反気味に立ち上がる。	口縁部は横方向のナデ調整、内外面底部はユビオサエの後不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：橙色
土師器小皿	10-16	口径：8.5 器高：1.4	底部は平坦で、口縁部は外上方へ直線的に立ち上がる。	口縁部、内面底部 $\frac{1}{2}$ 横方向のナデ調整、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：淡橙色
土師器小皿	10-17	口径：7.9 器高：1.2	底部は平坦で、口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部は横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：橙色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
土師器小皿	10-18	口径：7.5 器高：1.3	底部は平坦で、口縁部はわずかに内彎気味に立ち上がる。	口縁部は横方向のナデ調整、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：浅橙色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元

種類	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器小皿	10-19	口径：8.0 器高：1.2	底部は平坦で、口縁部は外上方へ直線的にのびる。	口縁部は横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：浅橙色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
土師器小皿	10-20	口径：7.4 器高：1.8	底部は丸味を持ちながら立ち上がり、口縁部は短く外反する。	口縁部は横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：橙色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
土師器小皿	10-21	口径：8.1 器高：1.6	底部は平坦で、口縁部は外上方へほぼ直線的に立ち上がる。	口縁部は横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰橙色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
土師器小皿	10-22	口径：8.2 器高：1.4	底部は平坦で、口縁部はやや内彎しながら立ち上がる。	口縁部は横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：浅黄橙色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
土師器小皿	10-23	口径：7.2 器高：1.3	底部は平坦で、口縁部は短く外反する。	口縁部は横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：橙色 反転復元
土師器小皿	10-24	口径：7.2 器高：1.2	底部は平坦で、口縁部は外上方へ直線的にのびる。	口縁部は横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：浅橙色 反転復元
土師器小皿	10-25	口径：7.4 器高：1.1	底部は平坦で、口縁部は短く外反する。	口縁部は横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：橙色 反転復元
土師器小皿	10-26	口径：6.8 器高：1.1	底部は平坦で、口縁部は短く外反する。	口縁部は横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：橙色 反転復元
土師器小皿	10-27	口径：8.1 器高：1.5	底部は平坦で、口縁部は外上方へ直線的に立ち上がる。	口縁部、内面底部 $\frac{1}{2}$ 横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：浅黄色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元

種類	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器小皿	10-28	口径：8.3 器高：1.3	底部は平坦で、口縁部は短く外反する。	口縁部は横方向のナデ調整、外面底部はユビオサエ、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：橙色 反転復元
土師器小皿	10-29	口径：7.8 器高：1.6	底部は平坦で、口縁部は外上方へ直線的に立ち上がる。	口縁部は横方向のナデ調整、他は、不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：橙色 反転復元
播鉢	10-30	口径：33.0	体部は外上方へ直線的に立ち上がり、口縁部は「く」の字に屈曲する。	口縁部は横方向のナデ調整、外面体部はヘラケズリ調整、内面体部はハケ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：黒灰色 反転復元
播鉢	10-31	口径：30.2	体部は外上方へ直線的に立ち上がり、口縁部は「く」の字に屈曲する。	口縁部は横方向のナデ調整、外面体部はヘラケズリ調整、内面体部はハケ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 反転復元
瓦質羽釜	11-32	口径：16.4	口縁部は内彎し、端部は平坦である、鏝はほぼ水平にのびる、口縁部外面には3条の凹線がめぐる。	口縁部、鏝部は横方向のナデ調整、外面体部はヘラケズリ調整、内面体部は不定方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：黒灰色 反転復元
瓦質羽釜	11-33	口径：24.7	口縁部は内傾し、端部は平坦である、鏝はほぼ水平にのびる、口縁部外面には3条の凹線がめぐる。	口縁部、鏝部は横方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：黒灰色 反転復元
瓦質羽釜	11-34	口径：24.7	口縁部は内傾し、端部は平坦である、鏝はほぼ水平にのびる、口縁部外面に2条の凹線がめぐる、口縁部に穿孔がみられる。	口縁部、鏝部は横方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 反転復元
瓦質羽釜	11-35	口径：25.6	口縁部は内傾し、端部は平坦である、鏝はほぼ水平にのびる、口縁部外面に2条の凹線がめぐる。	口縁部、鏝部は横方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 反転復元
瓦質羽釜	11-36	口径：26.0	口縁部は内彎し、端部は平坦である、鏝はやや上方へのびる、口縁部外面に横方向のナデによる段が生ずる。	口縁部、鏝部は横方向のナデ調整、内面体部はハケ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 反転復元



種類	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓦質甃	11-37	口径：35.9	口縁部は「く」の字形に外反する。	外面体部は平行タタキ、内面体部はハケ調整、口縁部は横方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 反転復元
瓦器壺	12-1	口径：13.8	体部はユビオサエによる凹凸が著しい。	内面体部は圈線ミガキ、口縁部は横方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 反転復元
瓦器壺	12-2	高台径：6.9	断面台形を呈する高台を持ち高台高は6mmを測る。	内面底部にはへラミガキが密に施されている。	胎土：密 焼成：良好 色調：黒灰色 高台部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
瓦器壺	12-3	高台径：5.0	低平化した断面台形を呈する高台をもつ。	内面底部には平行線文のへラミガキが施される。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 高台部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
瓦器壺	12-4	高台径：5.0	低平化した断面三角形を呈する高台をもつ。	内面底部には連結輪状文のへラミガキが施される。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 高台部残存： $\frac{1}{4}$ 反転復元
瓦器壺	12-5	高台径：6.2	断面台形を呈する高台をもち高台高は5mmを測る。	内外面共に摩滅しており、調整は不明である。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 高台部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
瓦器壺	12-6	高台径：4.8	低平化した断面不整形を呈する高台をもつ。	内面底部には連結輪状文のへラミガキが施される。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 高台部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
瓦器小皿	12-7	口径：9.7	横方向の強いナデにより、短く外反する口縁部をもつ。	内面はへラミガキ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 反転復元
土師器皿	12-8	口径：12.8 器高：3.95	底部は平坦で、口縁部は外上方へ直線的にのびる。	内外面共に摩滅しており、調整は不明である。	胎土：密 焼成：良好 色調：浅橙色 反転復元

種類	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器小皿	12-9	口径：7.3 器高：2.1	底部は平坦で、口縁部は短く外反する。	口縁部は横方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：浅黄色 反転復元
土師器小皿	12-10	口径：7.2 器高：1.6	底部は比較的平坦で、口縁部は外上方に直線的に短くのびる。	口縁部は横方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：浅橙色 反転復元
土師器小皿	12-11	口径：6.8 器高：1.2	底部は比較的平坦で、口縁部は外上方に直線的に短くのびる。	口縁部は横方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：橙色 反転復元
土師器小皿	12-12	口径：7.8 器高：2.0	底部は平坦で、口縁部は短く外反する。	口縁部は横方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：橙色 反転復元
須恵器坏身	12-13	高台径：7.8	体部の直下に低平化下断面不整形を呈する高台をもつ。高台端面はわずかに凹面を呈する。	内外面底部は横方向のナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 反転復元
須恵器坏蓋	16-1	口径：12.4 天井高：5.7	口縁部は丸味を有しながら、ほぼ垂直に下る。端部は、わずかに凹面を呈する。稜線は断面三角形を呈し、シャープさに欠ける。天井部中央に上面凹状のつまみを持つ。	外面天井部 $\frac{3}{4}$ 、回転ヘラケズリ調整 外面天井部、回転カキ目調整 内面天井部 $\frac{1}{2}$ 、一定方向のナデ調整 他はヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色
須恵器坏蓋	16-2	口径：13.4 天井高：5.0	口縁部はほぼ垂直に下る。端部は内面に段が生ずる。稜線はシャープさに欠ける。天井部中央に凸状のつまみを持つ。	外面天井部 $\frac{3}{4}$ 、回転ヘラケズリ調整 内面天井部 $\frac{1}{2}$ 、一定方向のナデ調整 他はヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好
須恵器坏蓋	16-3	口径：12.9 天井高：5.6	口縁部は丸味を有しながらほぼ、垂直に下る。端部は平坦である。稜線は断面三角形を呈し、シャープさに欠ける。天井部中央に上面凹状のつまみを持つ。	外面天井部 $\frac{1}{2}$ 、回転ヘラケズリ調整 外面天井部、回転カキ目調整 内面天井部 $\frac{3}{4}$ 、不定方向のナデ調整 他はヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色
須恵器坏蓋	16-4	口径：12.4 天井高：4.9	口縁部は丸味を有しながら、ほぼ垂直に下る。端部は内面に段が生ずる。稜線はシャープさに欠ける。天井部中央に上面凹状のつまみを持つ。	外面天井部 $\frac{3}{4}$ 、回転ヘラケズリ調整 内面天井部 $\frac{1}{2}$ 、一定方向のナデ調整 他はヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色

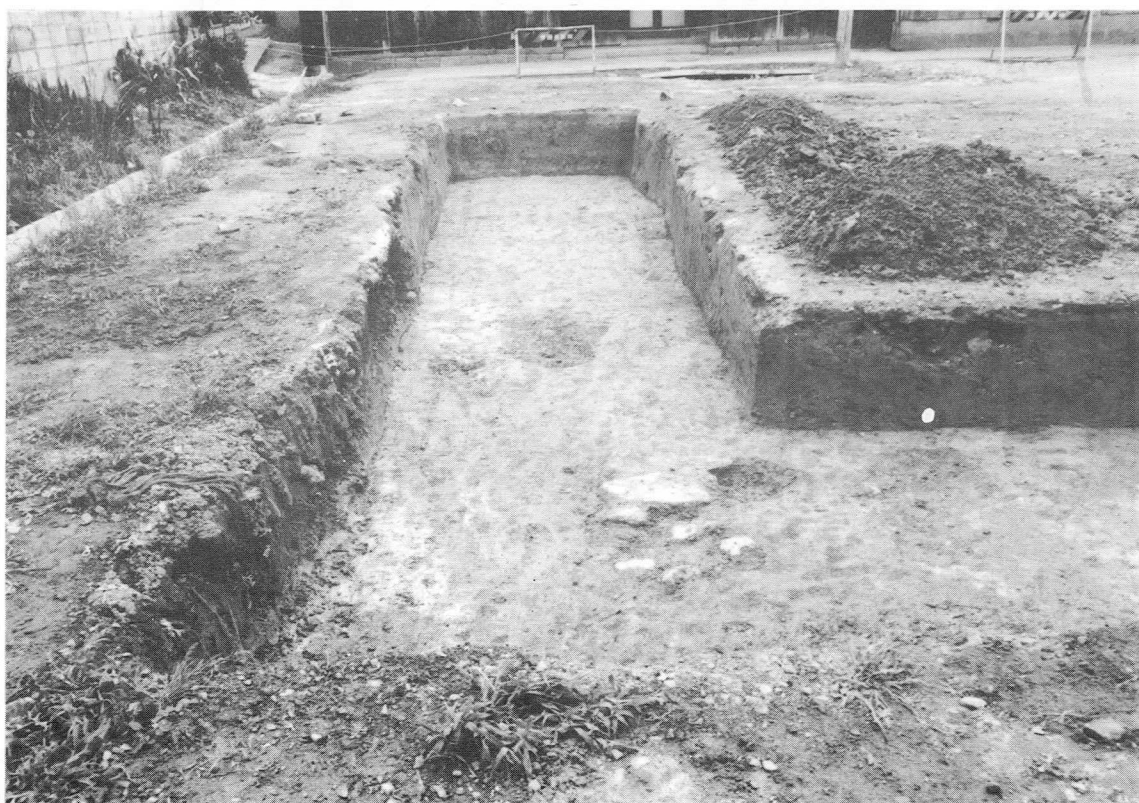
種類	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器 坏蓋	16-5		口縁部は、ほぼ垂直に下り、わずかに外反する。端部は内面に段が生ずる。稜線はシャープさに欠ける。	外面天井部 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラケズリ調整 内面天井部 $\frac{1}{2}$ 一定方向のナデ調整 他はヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
須恵器 坏蓋	16-6	口径：10.1 推定天井高： 3.7	口縁は外反気味に下る。端部は内面に段が生ずる。稜線はシャープさに欠ける。	外面天井部、回転ヘラケズリ調整 他はヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 口縁部残存： $\frac{1}{4}$ 反転復元
須恵器 坏身	16-7	口径：10.0	たちあがりは外反気味に上り、端部は、内面に段が生ずる。稜線はシャープさに欠ける。受部はやや下方へのび、端部は丸い。	口縁部、ヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 反転復元
須恵器 高坏脚部	16-8	脚底径：10.5	脚部は外面気味に下り、断面三角形の突帯をめぐらし、再び下外方へのびる。端部は内傾する平面を有し、内端部で接地する。	脚部、ヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 脚底部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
須恵器 有蓋高环	16-9	口径：10.6 器高：9.3	坏部たちあがりは内傾し、端部は内面に段が生ずる。稜線はシャープさに欠ける。受部は上外方へのび、端部は丸い。脚部は外反して下り、端部近くで凸帯をめぐらし、下方に屈曲する。3方向に長方形の透しを持つ。	外面坏底部 $\frac{1}{2}$ 、回転ヘラケズリ調整 内面坏底部 $\frac{1}{2}$ 、不定方向のナデ調整 他はヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色
須恵器 有蓋高环	16-10	口径：10.5 器高：10.1	坏部たちあがりは内傾し、端部は内面に段を生ずる。稜線はシャープさに欠ける。受部は上外方へのび、端部は丸い。脚部は下外方に、端部は丸味を持つ。4方向に長方形の透しを持つ。	外面坏底部 $\frac{1}{2}$ 、回転ヘラケズリ調整 内面坏底部 $\frac{1}{2}$ 、不定方向のナデ調整 他はヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色
須恵器 有蓋高环	16-11	口径：10.5 器高：9.3	坏部たちあがりはやや外彎気味に上り、端部は内面に段が生ずる。稜線はシャープさに欠ける。受部はほぼ水平へのび、端部は丸い。脚部は外反して下り、端部は丸味を持つ。3方向に長方形の透しを持つ。	外面坏底部 $\frac{1}{2}$ 、回転ヘラケズリ調整 内面坏底部 $\frac{1}{2}$ 、不定方向のナデ調整 他はヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色
須恵器 有蓋高环	16-12	口径：10.6	坏部たちあがりは、やや外彎気味に上り、端部は内面に段が生ずる。稜線は、シャープさに欠ける。受部はほぼ水平へのび、端部は丸い。	外面坏底部 $\frac{1}{2}$ 、回転ヘラケズリ調整 内面坏底部 $\frac{1}{2}$ 、不定方向のナデ調整 他はヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良 色調：灰色 脚部欠損
須恵器 有蓋高环	16-13	口径：18.8	坏体部は内彎気味に立ち上り、2条の断面三角形の凸帯をめぐらし、外反する口縁部に至る。端部は丸味を持つ。体部中位に1条の波状文が施され文様帯上につまみ飾りが左右に付く。	内面坏部 $\frac{1}{2}$ 、不定方向のナデ調整 他はヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰白色 脚部欠損

種類	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器甕	17-14	口径：23.8	口頸部は外面にのびに断面三角形の凸帯を1条めぐらし、端部で上方に屈曲し、外端面が凹面を呈する。	外面体部、平行タタキ 内面体部、不定方向のナデ調整 他はヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰白色 口縁部残存：％ 反転復元
須恵器台付有蓋短頸壺	17-15	口径：10.6	口頸部は外彎気味に上方にのび受部状の凸帯をめぐらす。端部は丸味をもつ。たちあがりはやや外反気味に上り、端部は、ほぼ平坦である。体部上位に最大径が位置し、肩部に刺突文、口頸部、最大頸部に波状文が施される。	外面体部下位、平行タタキ 他はヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色
須恵器器台	17-16	口径：34.2	台部はやや内彎気味に上外方にのび、端部近くで外反する。中位に2条、 $\frac{3}{4}$ に2条、端部直下に1条の凸帯をめぐらし、凸帯により界された部分に波状文が施されている。口縁端部は凹面を呈する。	台部外面底部、平行タタキ 他はヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：外…暗灰色 内…灰色
須恵器器台脚部	17-16'	脚底径：29.8	外面には2条の断面三角形の凸帯を2段にめぐらし、その間に3条の波状文と三角形の透しを持つ。脚端部は、内傾する平面を呈し、内端部で接地する。	ヨコナデ調整	胎土：密 焼成：良好 色調：灰白色 反転復元
黒色土器碗	18-17	口径：15.7	口縁部の様方向の強いナデにより、体部との境界にゆるやかな段差が生ずる。	外面ヘラミガキの密度は低いが、分割・規則性が見られる。内面のヘラミガキは不定方向に密に施される。外面体部はユビオサエの痕跡が顕著。	胎土：密 焼成：良好 色調：外…暗灰色 内…黒灰色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
瓦器碗	18-18	口径：14.4 器高：4.0 高台径：4.4	低平化した断面台形を呈する高台を持つ、底部からゆるやかに丸味を持ち外上方へ立ち上り、口縁部に至る。器高の縮小化が進んでいる。口縁端部内面はやや面取り気味である。	外面ヘラミガキは施されない。内面ヘラミガキは体部に圏線ミガキと底部の連結輪状文で構成される。外面体部はユビオサエの痕跡が顕著。内外面共に摩滅しており、調整は不明である。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 高台部残存：％ 反転復元
瓦器碗	18-19	口径：15.0	低平化した断面台形を呈する高台を持つ底部から、やや内彎気味に立ち上り、口縁部に至る。	内外面共に摩滅しており、調整は不明である。	胎土：密 焼成：良好 色調：黄灰色 口縁部残存： $\frac{1}{3}$ 反転復元
瓦器碗	18-20	口径：14.0 器高：4.4	低平化した断面台形を呈する高台を持つ底部から、ゆるやかに丸味を持ち、外上方の立ち上り口縁部に至る。	外面ヘラミガキは施されない。内面ヘラミガキは体部に圏線ミガキが施される底部のヘラミガキは不明である。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰白色 口縁部残存：％ 反転復元
瓦器碗	18-21	口径：14.6 器高：4.2 高台径：3.9	低平化した断面台形を呈する高台を持つ、底部からやや内彎気味に立ち上り、口縁部に至る。	内外面共に摩滅しており、調整は不明である。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 高台部残存： $\frac{1}{3}$ 反転復元

種類	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓦器 碗	18-22	口径：15.4 器高：4.5 高台径：4.2	低平化した断面台形を呈する高台を持つ底部から、やや内彎気味に立ち上り、口縁部に至る。	内外面共に摩滅しており、調整は不明である。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 高台部残存： $\frac{1}{3}$ 反転復元
瓦器 小碗	18-23	口径：10.6	高台を持たないもので、底部は突底気味である。	ヘラミガキは施されない。	胎土：密 焼成：炭素付着は不十分である。 色調：外…灰色 内…灰白色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
瓦器 小皿	18-24	口径：9.3 器高：2.0	丸味をおびた底部を持ち、口縁部は横方向の強いナデにより短く外反する。	内面はヘラミガキが施される。	胎土：密 焼成：良好 色調：黒灰色 口縁部残存： $\frac{1}{2}$ 反転復元
土師器 小皿	18-25	口径：9.5	平坦な底部を持ち、口縁部は外反気味に屈曲する。器壁は5～7mmを測り厚手である。	内外面共に摩滅しており、調整は不明である。	胎土：密 焼成：良好 色調：浅橙色 反転復元
土師器 小皿	18-26	口径：10.4 器高：1.6	平坦な底部を持ち、口縁部は外反気味に屈曲する。器壁は5～7mmを測り厚手である。	糸切り底か？	胎土：密 焼成：良好 色調：浅橙色 口縁部残存： $\frac{1}{6}$ 反転復元
土師器 小皿	18-27	口径：7.8	平坦な底部から丸味をもって、外上方へ短く立ち上る口縁部を持つ。	内外面共に摩滅しており、調整は不明である。	胎土：密 焼成：良好 色調：橙色 口縁部残存： $\frac{1}{4}$ 反転復元
土師器 小皿	18-28	口径：7.7	平坦な底部から丸味をもって、外上方へ短く立ち上る口縁部を持つ。	内外面共に摩滅しており、調整は不明である。	胎土：密 焼成：良好 色調：浅橙色 口縁部残存： $\frac{1}{6}$ 反転復元
土師器 小皿	18-29	口径：7.8 器高：1.2	平坦な底部から丸味をもって、外上方へ短く立ち上る口縁部を持つ。	内外面共に摩滅しており、調整は不明である。	胎土：密 焼成：良好 色調：浅黄色 口縁部残存： $\frac{1}{6}$ 反転復元

圖

版



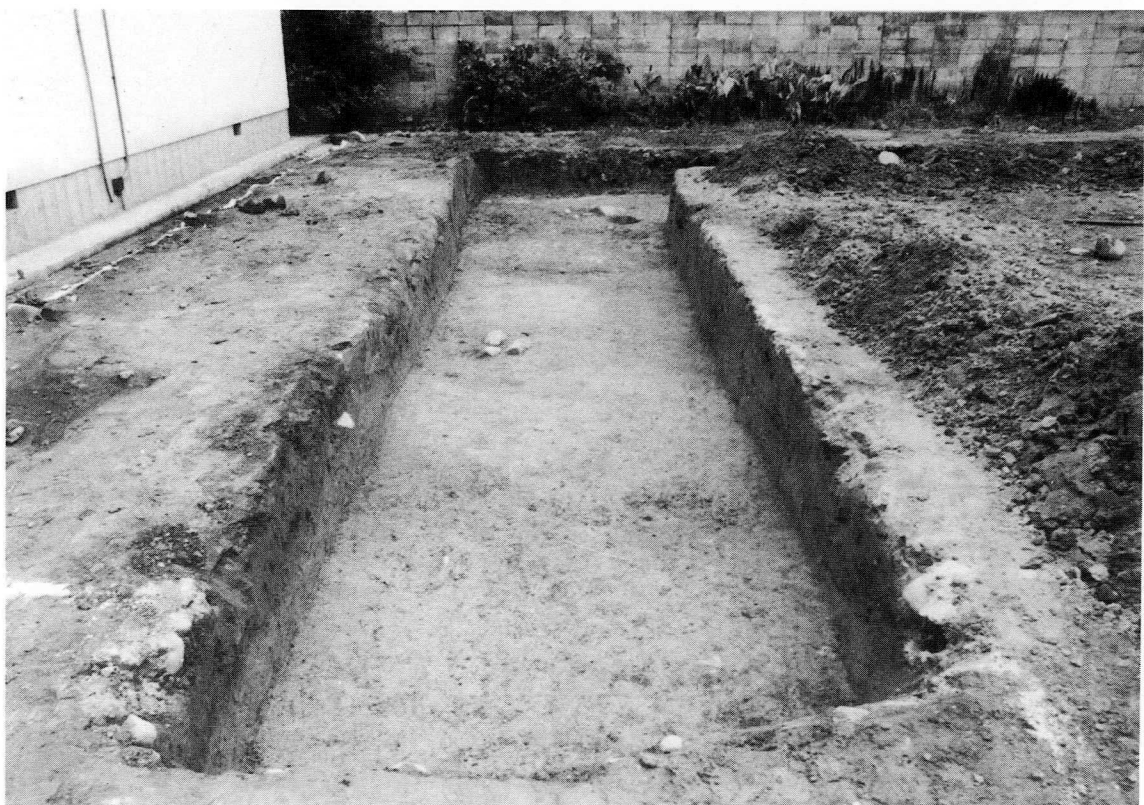
(1) 東西トレンチ全景

西より



(2) 同 上

東より



(1) 南北トレンチ全景

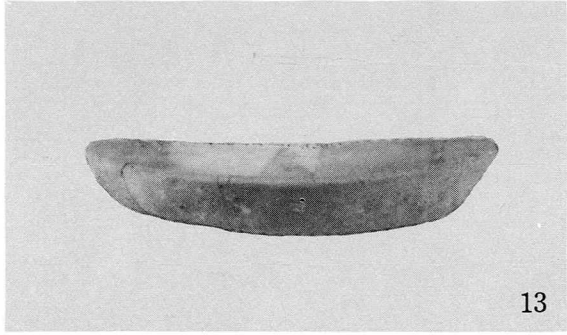
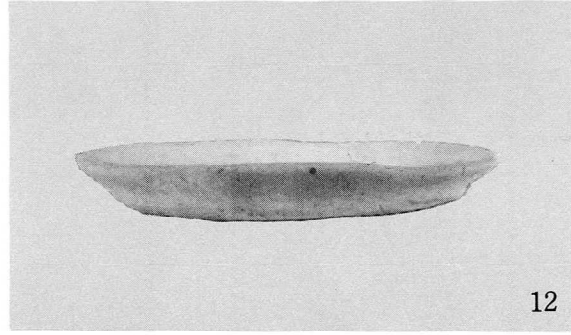
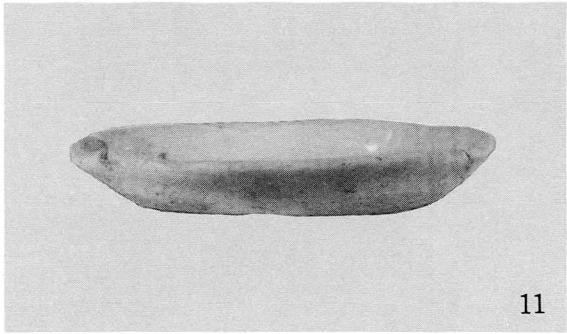
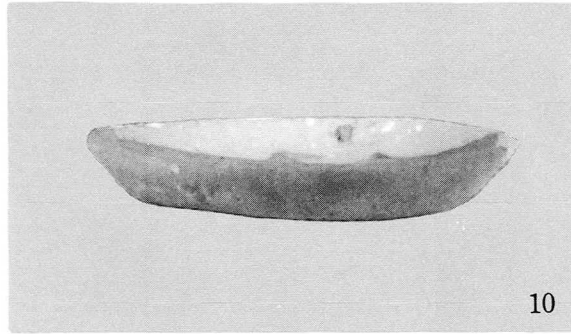
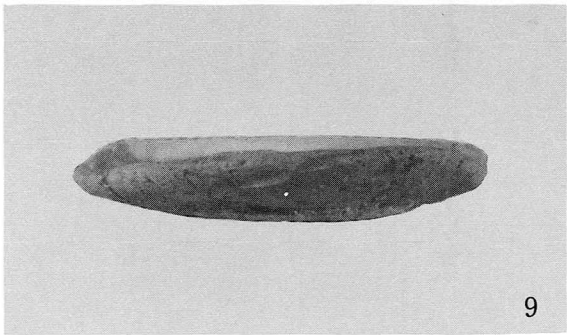
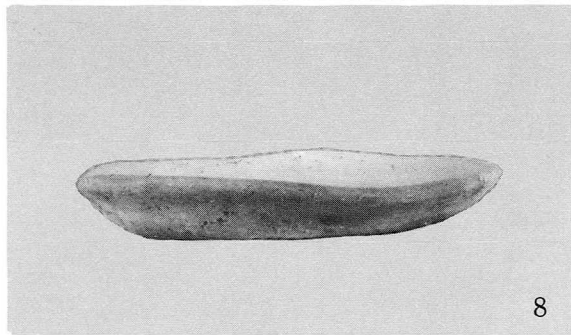
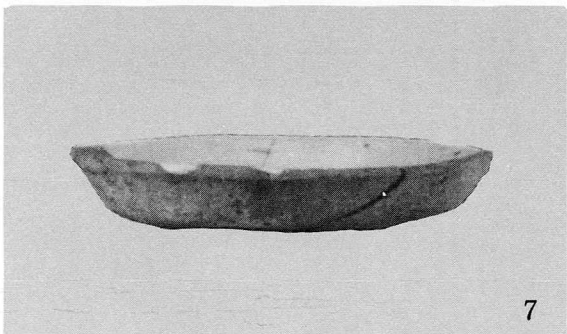
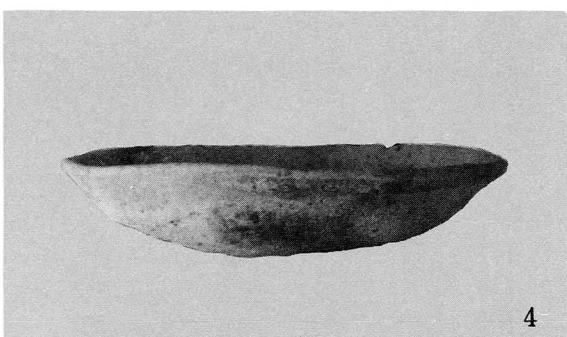
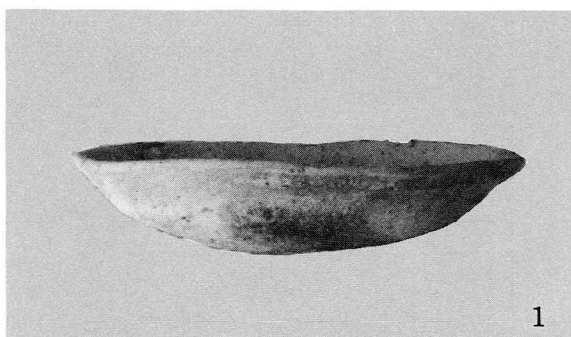
南より



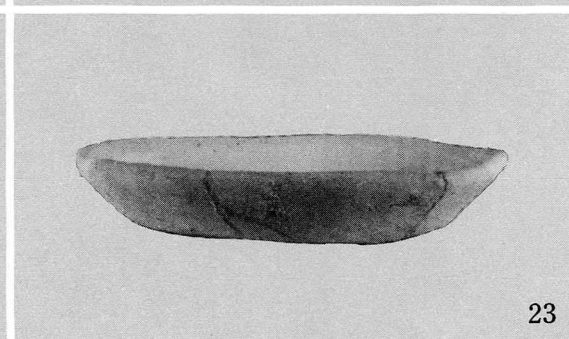
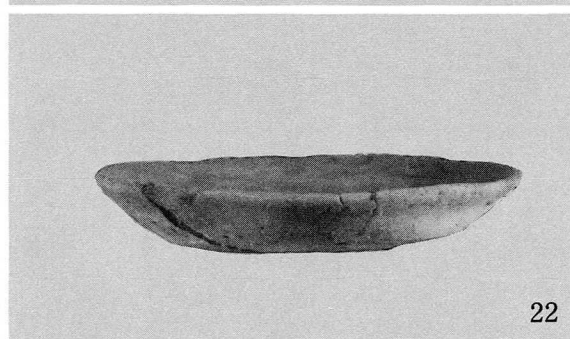
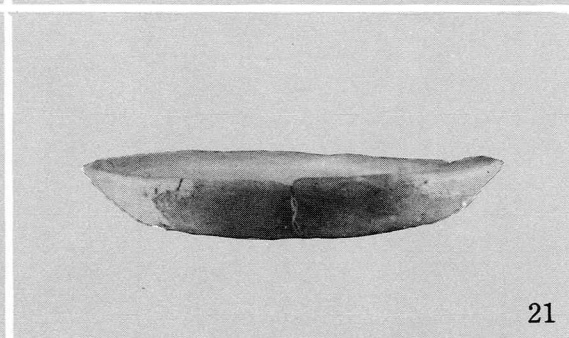
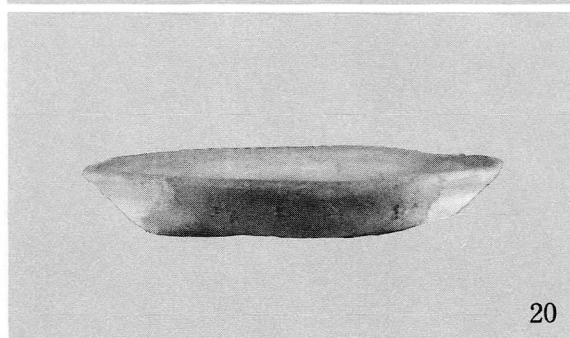
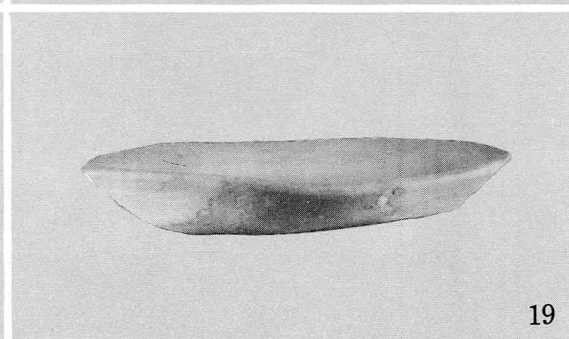
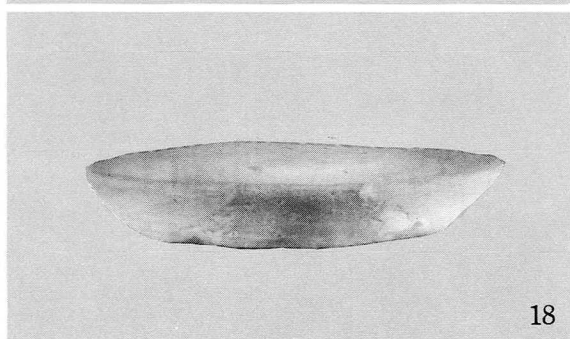
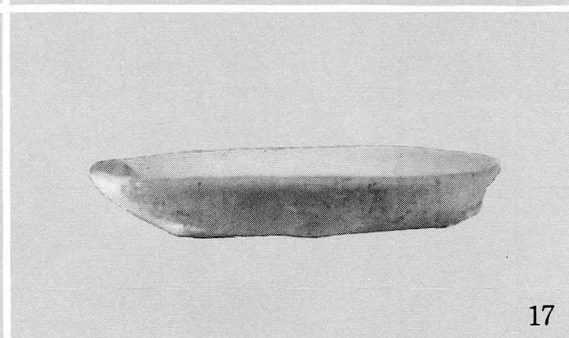
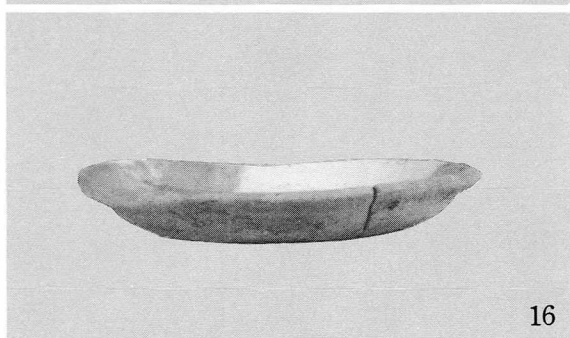
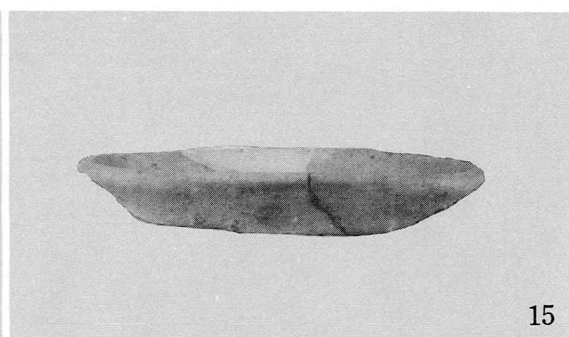
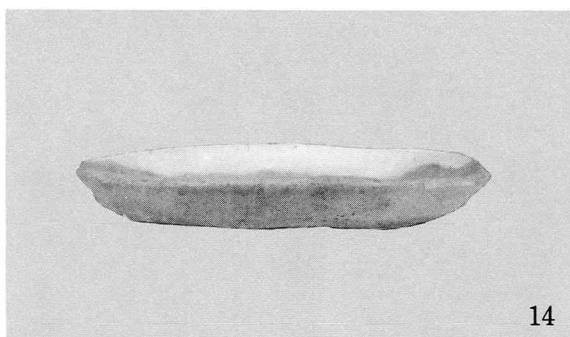
(2) 同 上

北より

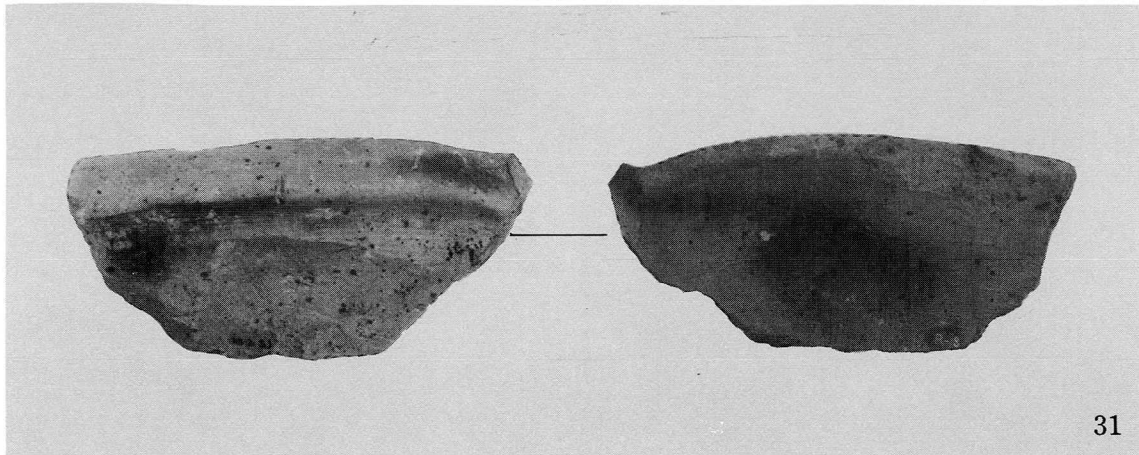
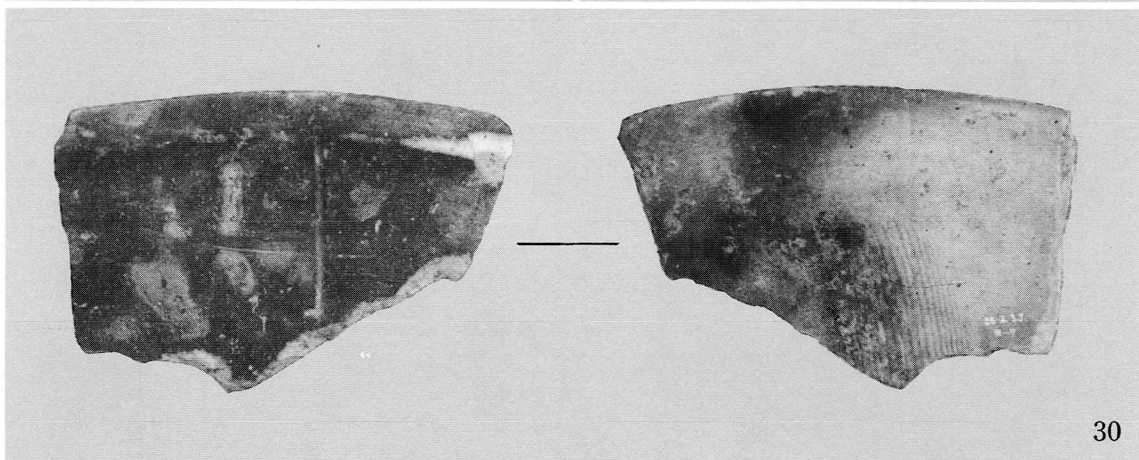
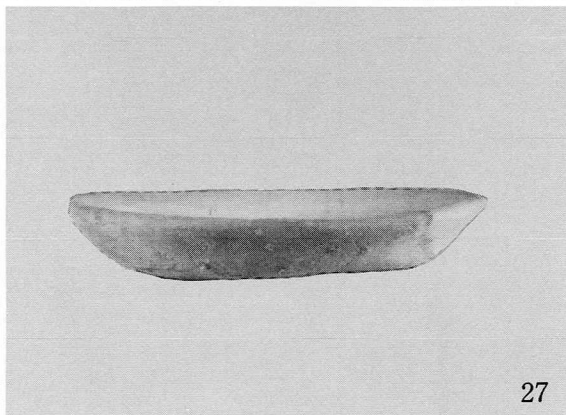
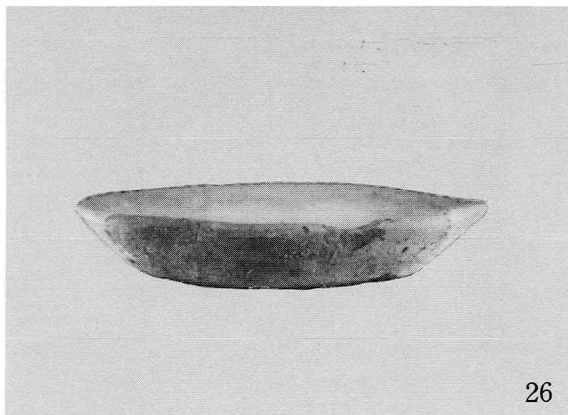
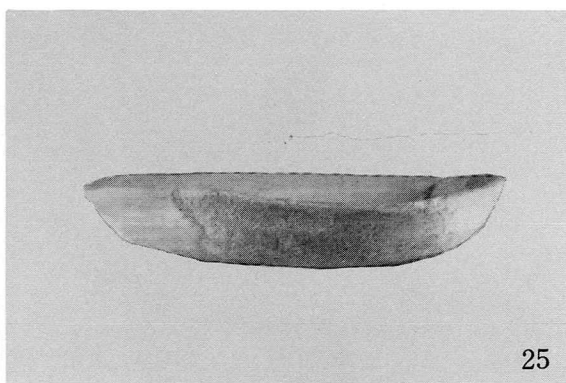
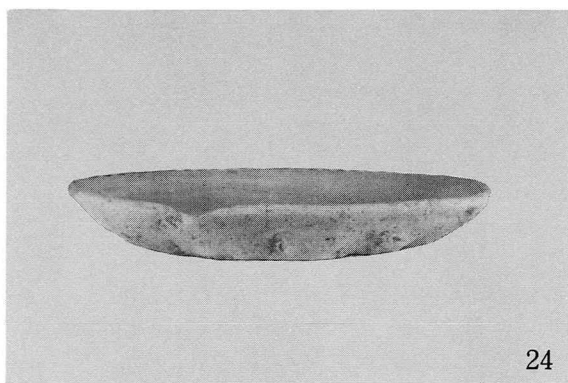




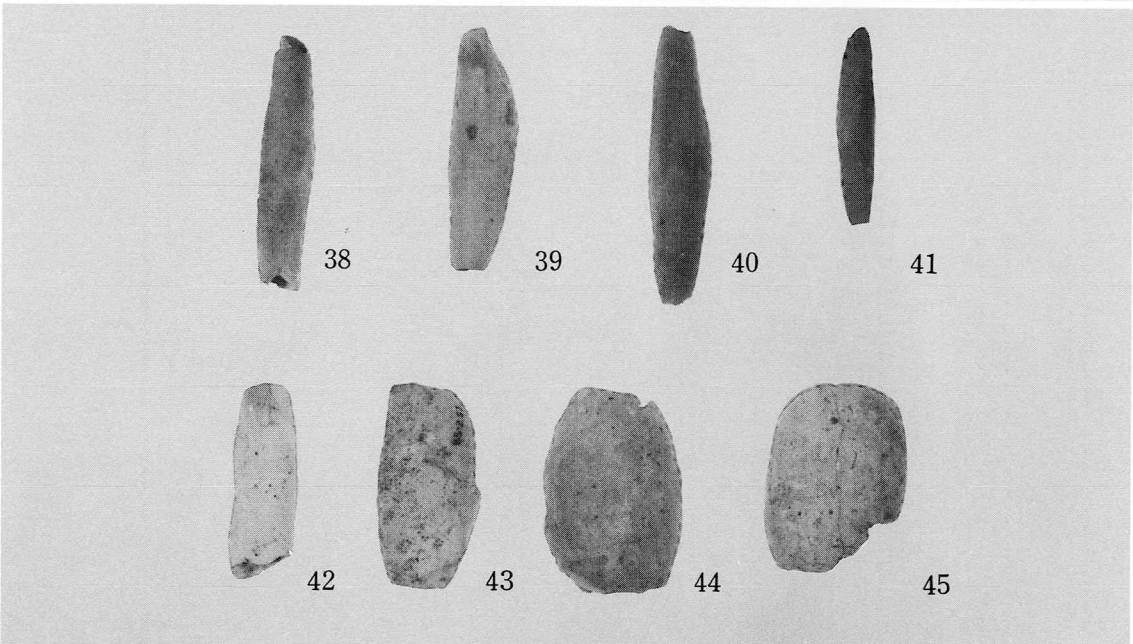
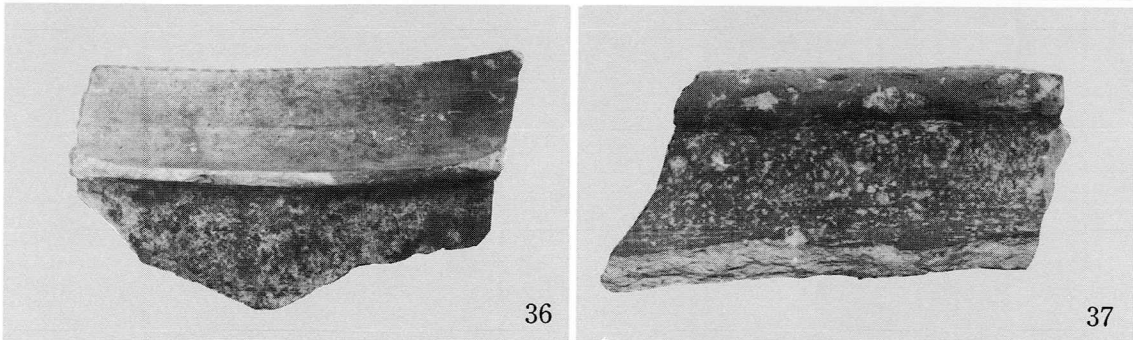
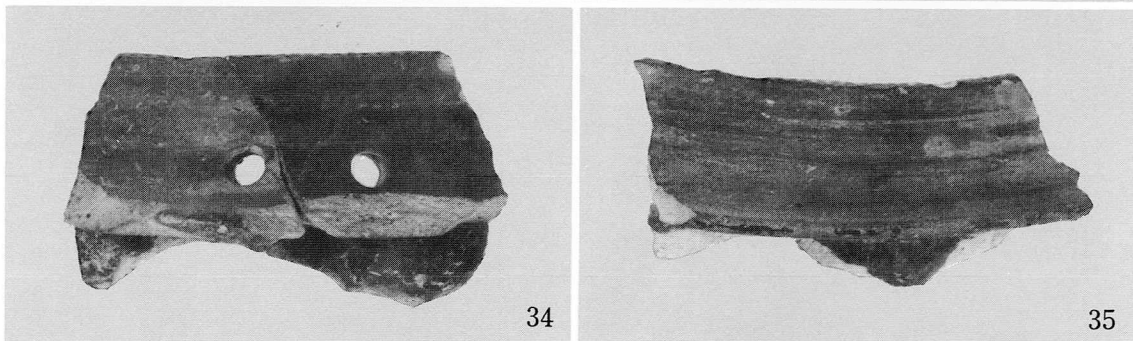
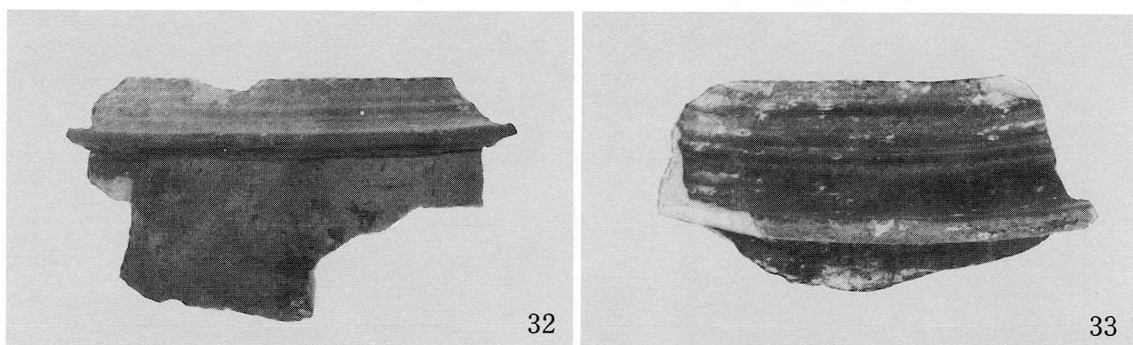
瓦器小碗(1・4)、土師器皿(5)、土師器小皿(7~13)



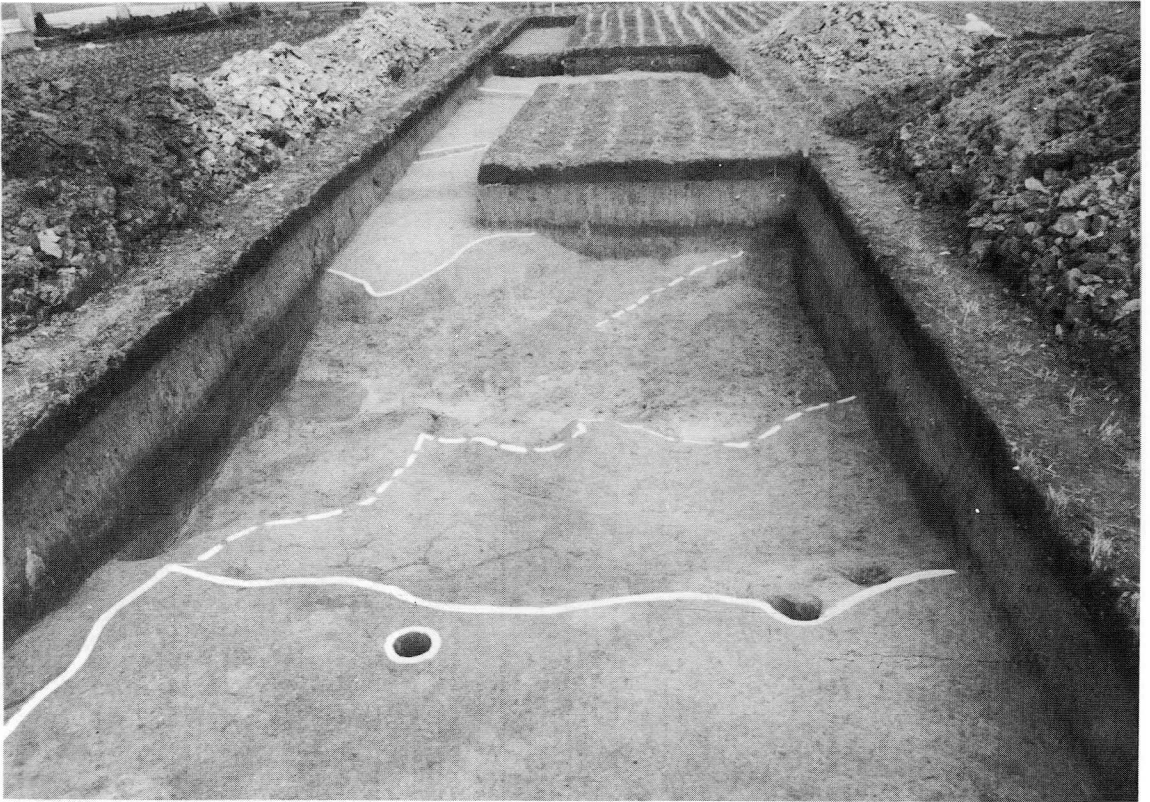
土師器小皿(14~23)



土師器小皿(24~27)、擂鉢(30・31)



瓦質羽釜(32~36)、瓦質甕(37)、土錘(38~45)



(1) A区 SD-1~3全景

南西より



(2) 同 上

南東より



(1) A区 SD-4

南より



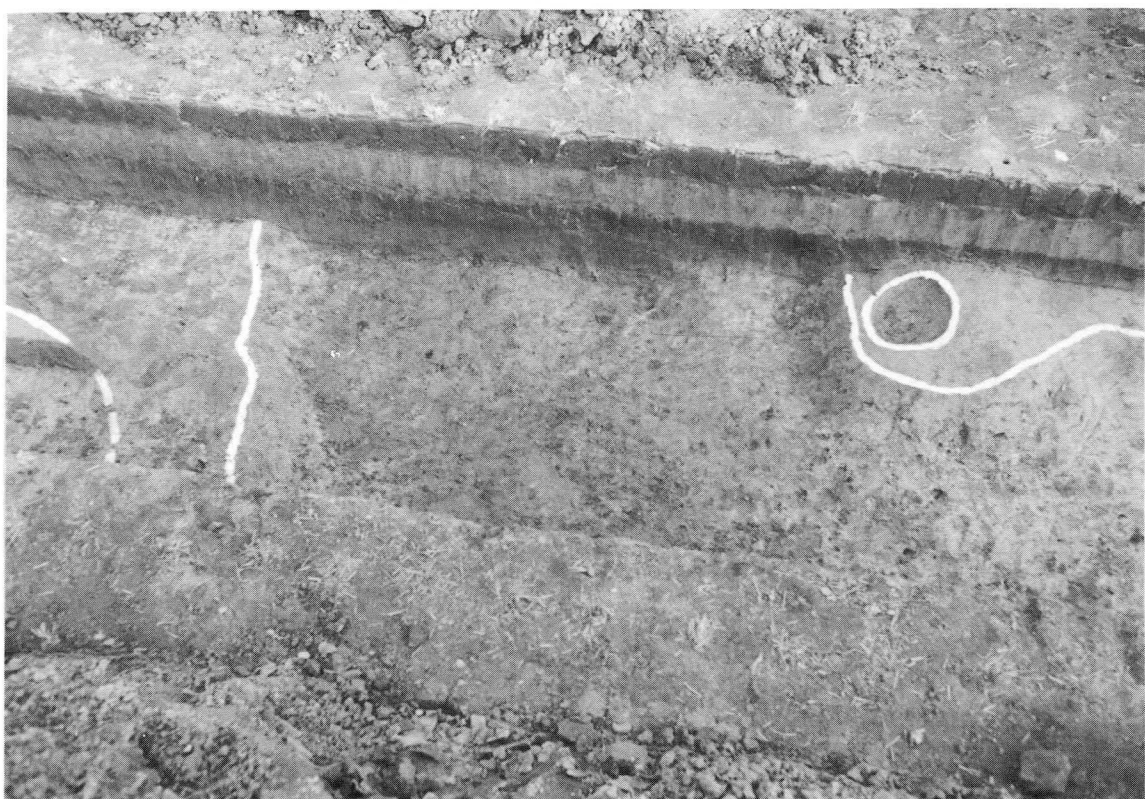
(2) 同 上 土層断面

南東より



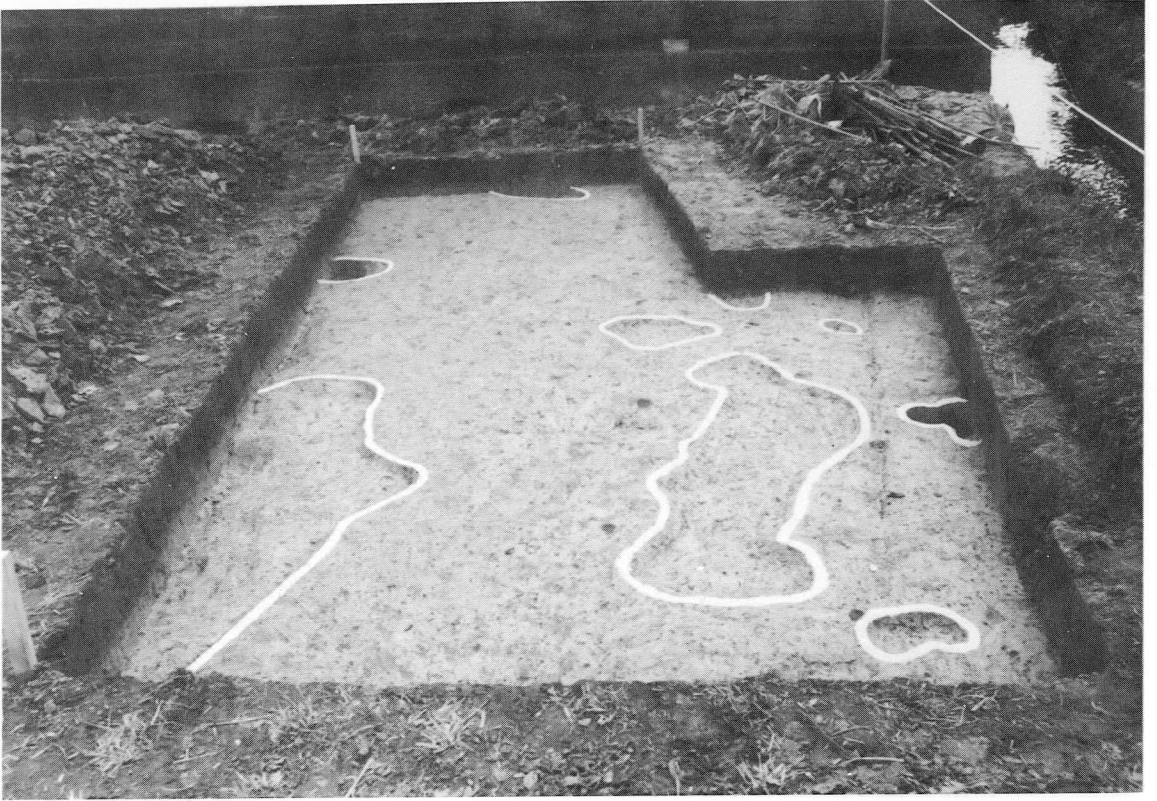
(1) B区全景

南西より



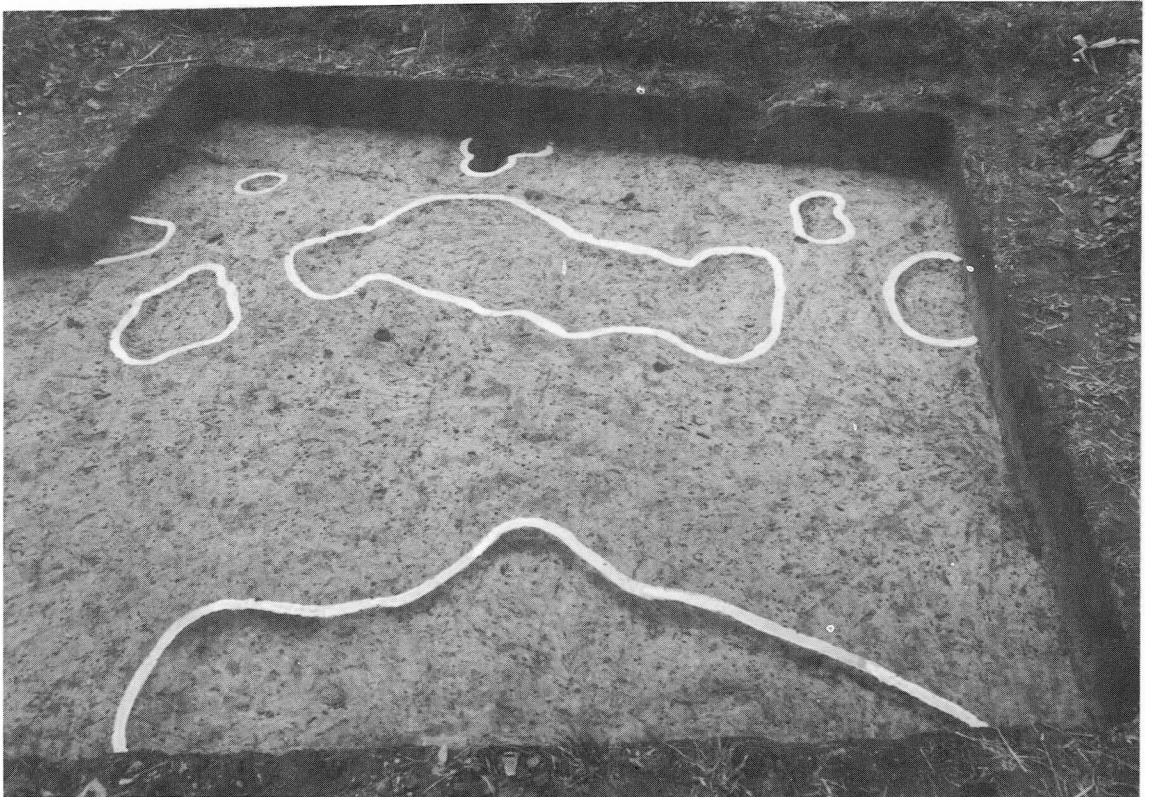
(2) 同 上 SD-2 全景

北西より



(1) C区全景

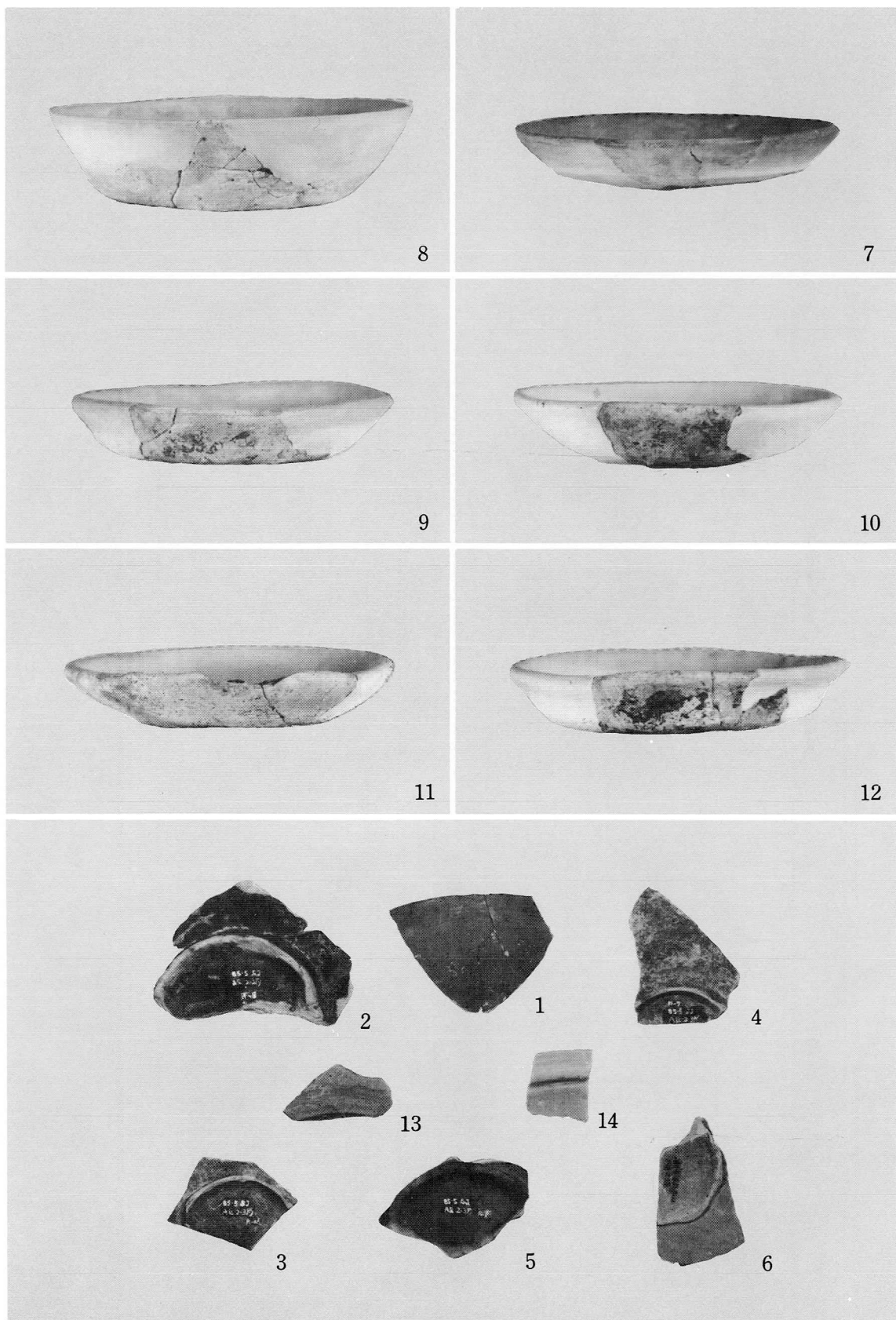
北西より



(2) 同 上

北東より



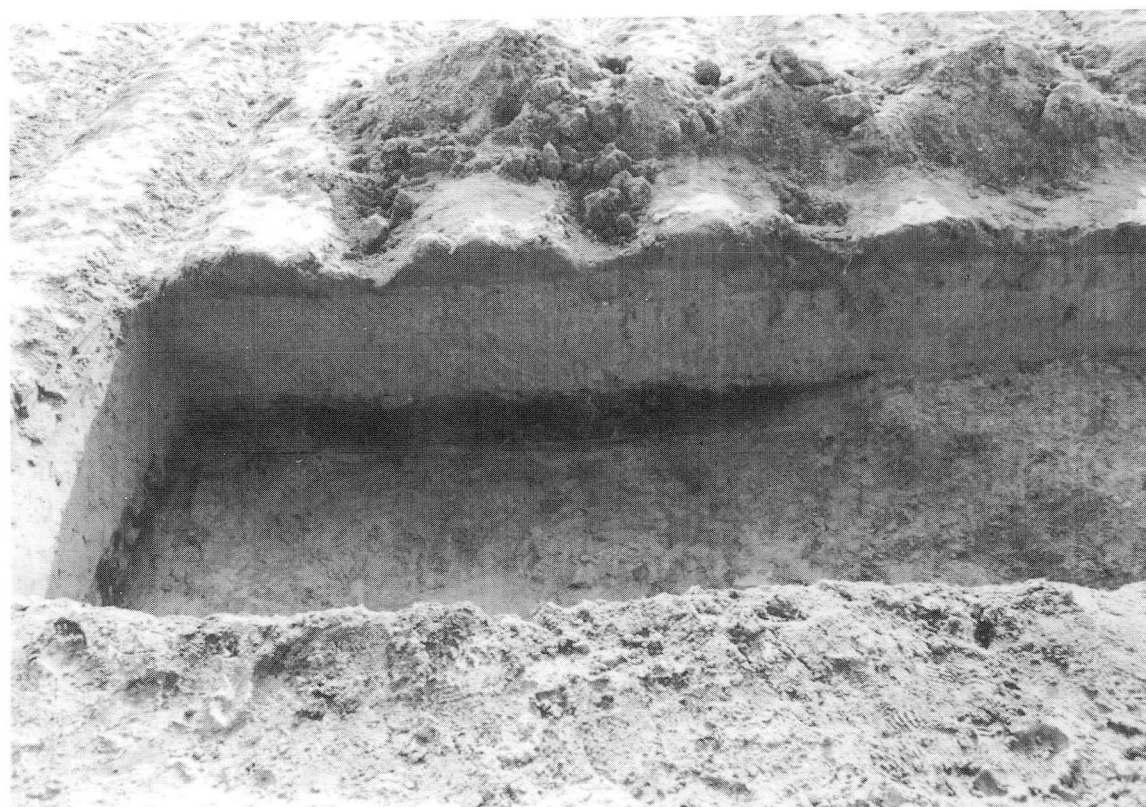


瓦器碗(1~6)、瓦器小皿(7)、土師器皿(8)、土師器小皿(9~12)、須恵器坏身(13)、白磁(14)



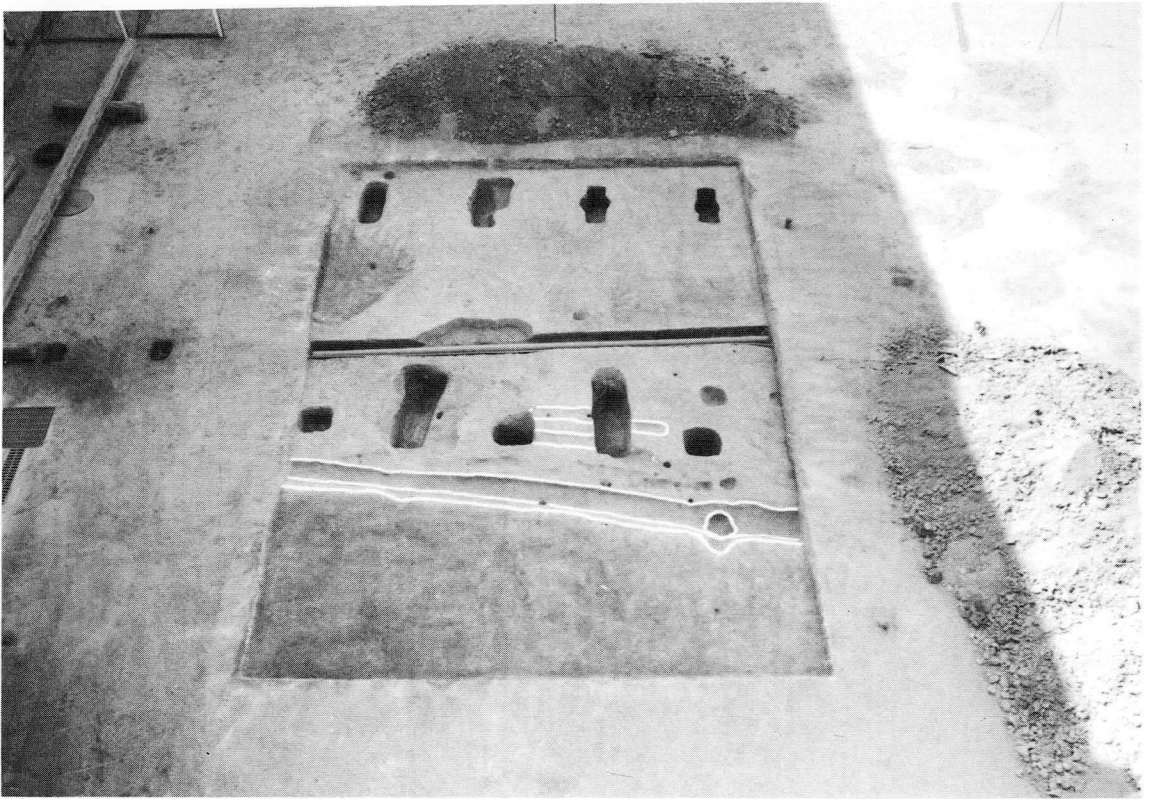
(1) 調査区全景

南東より



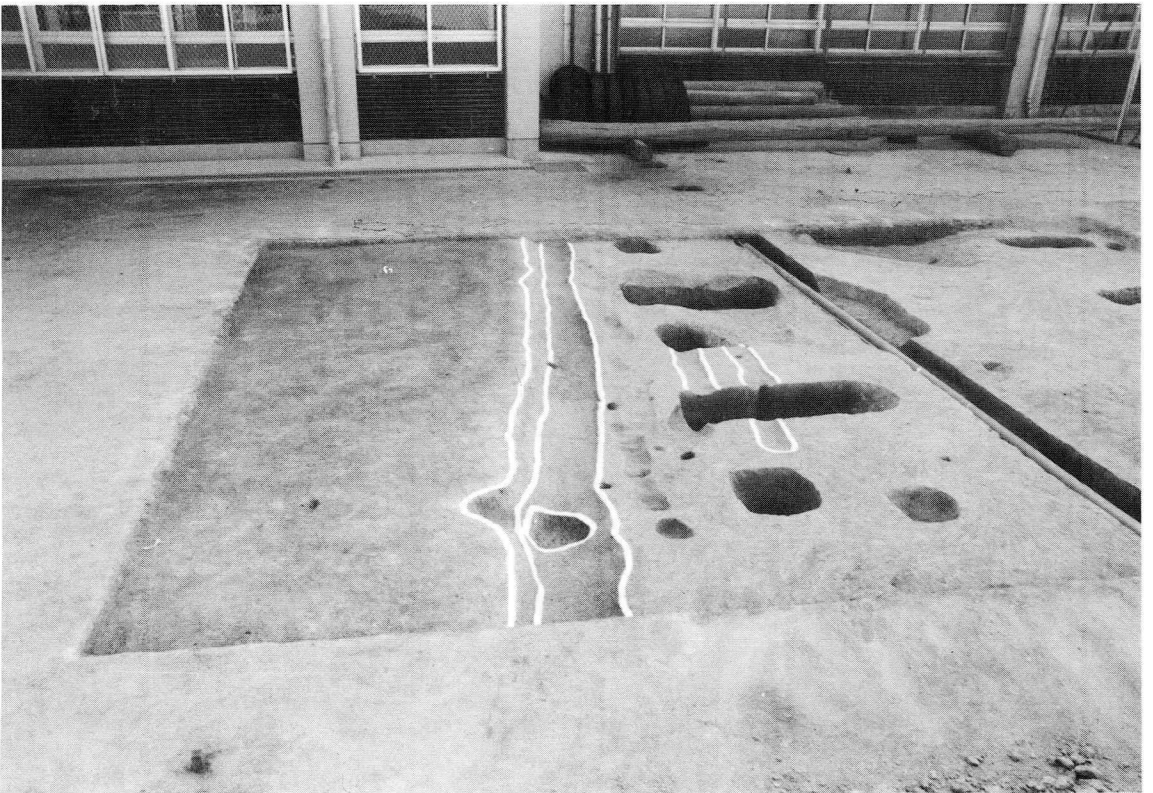
(2) 同 上 部分

北東より



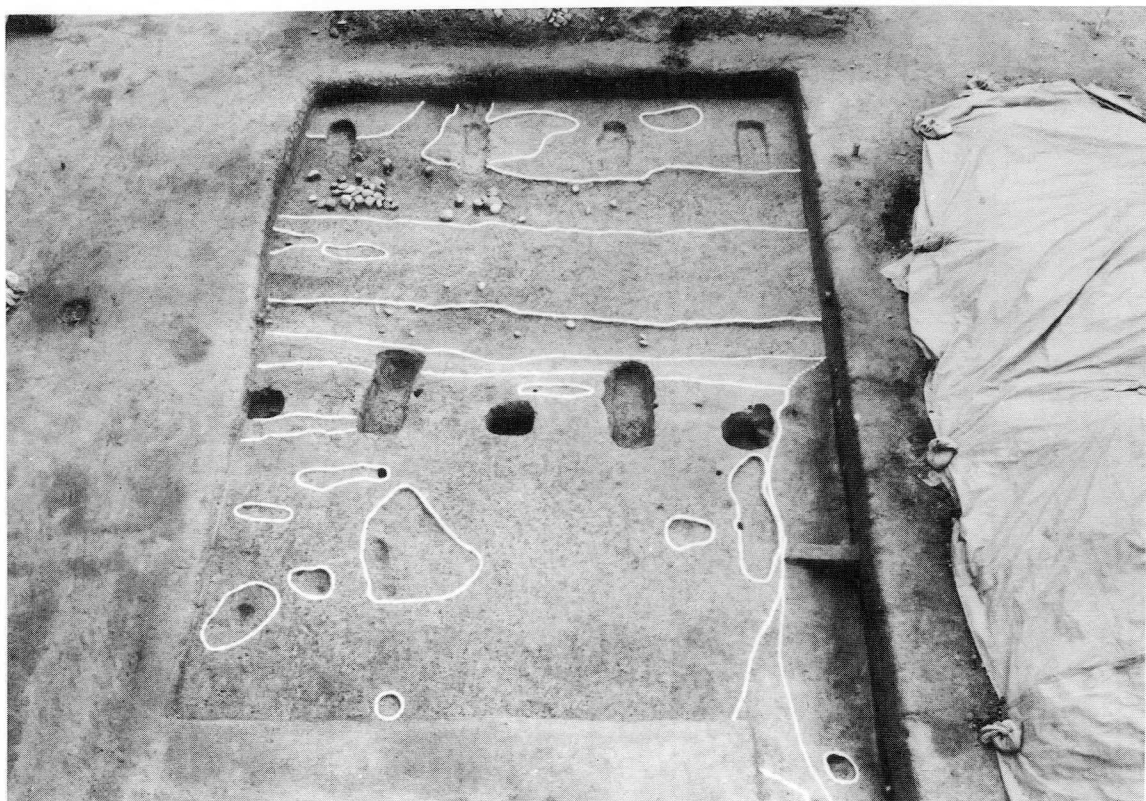
(1) 第2調査区上層遺構全景

南より



(2) 同 上部分

東より



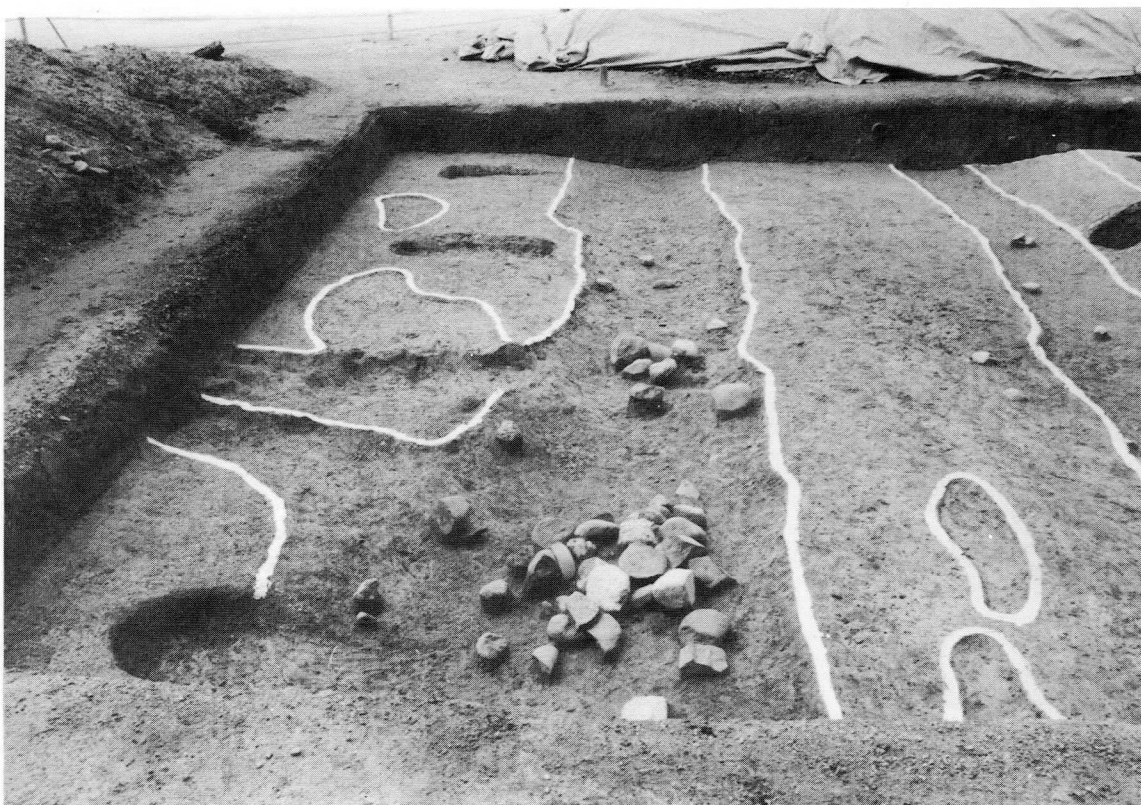
(1) 第2調査区下層遺構全景

南より



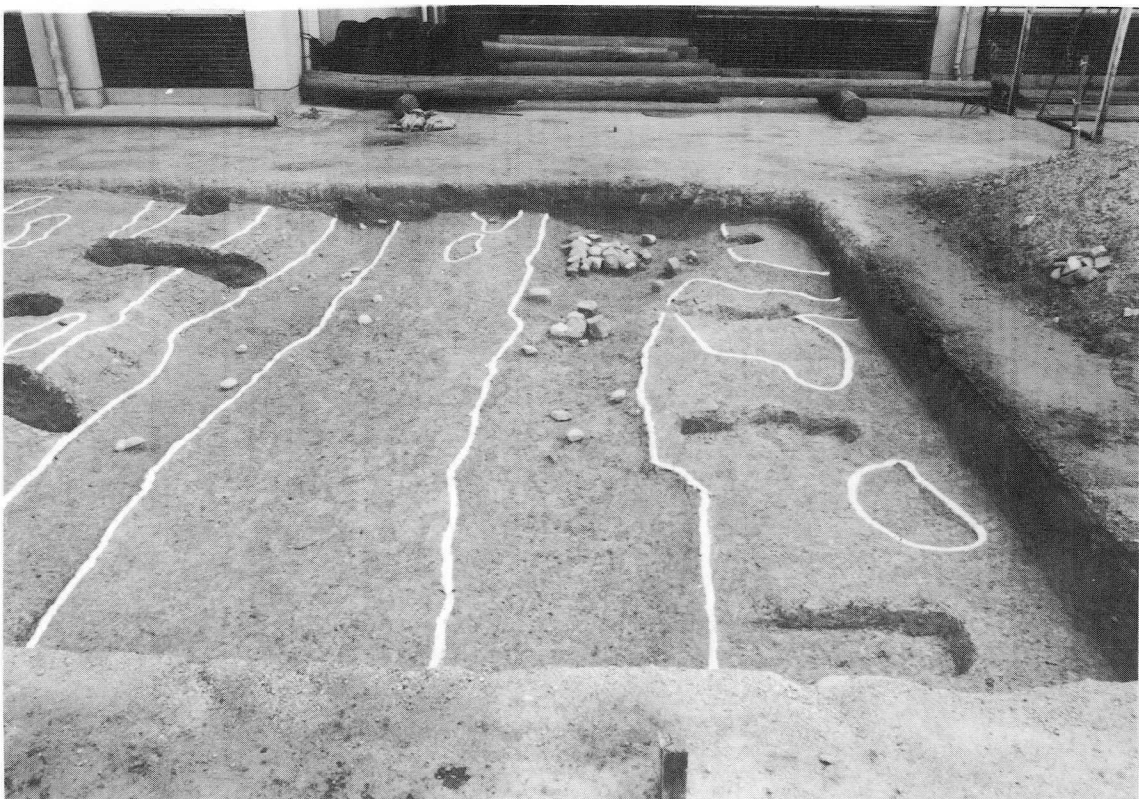
(2) 同 上

北より



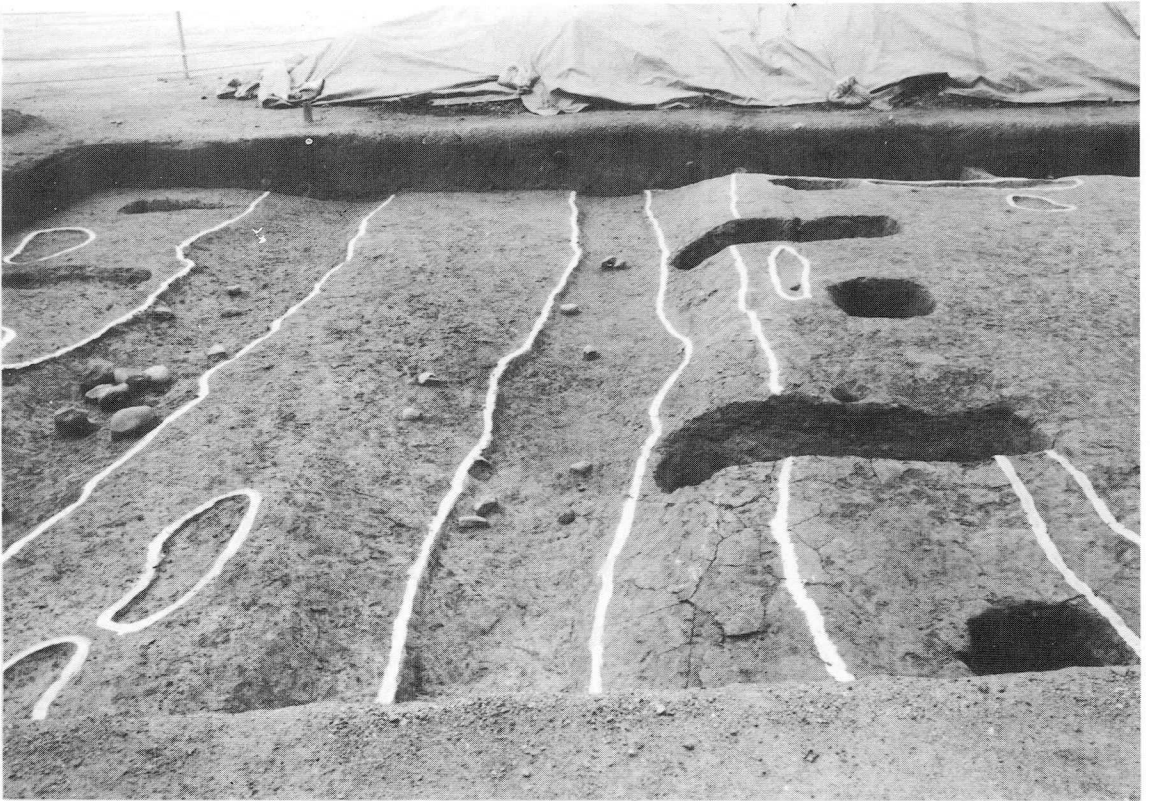
(1) 第2調査区SD-85301全景

西より



(2) 同上

東より



(1) 第2調査区SD-85302全景

西より



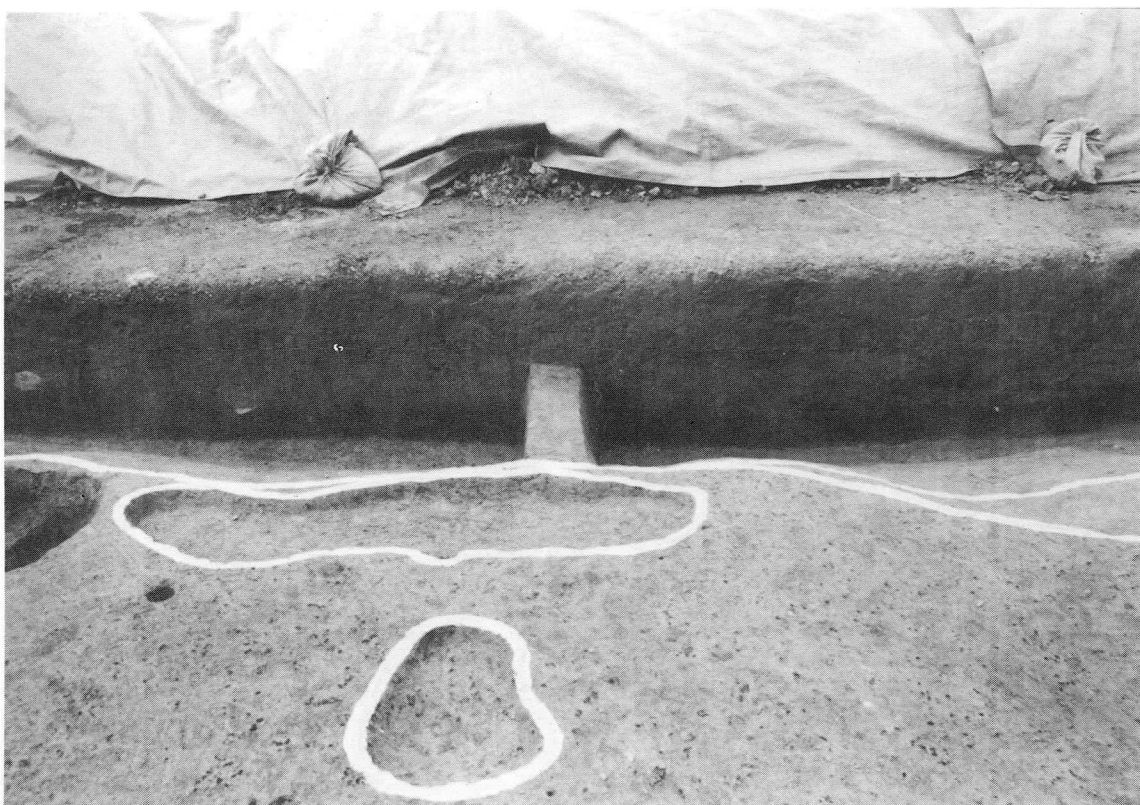
(2) 同 上 土層断面

西より



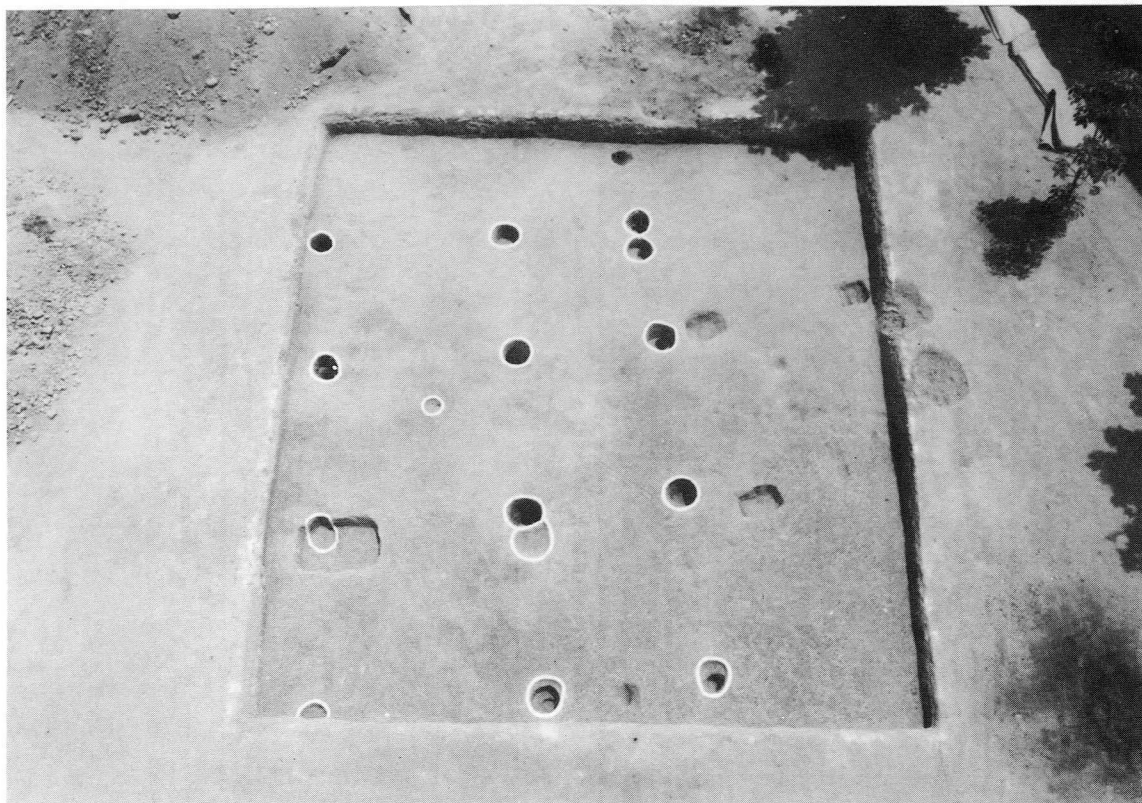
(1) 第2・3調査区 2号墳周濠全景

南より



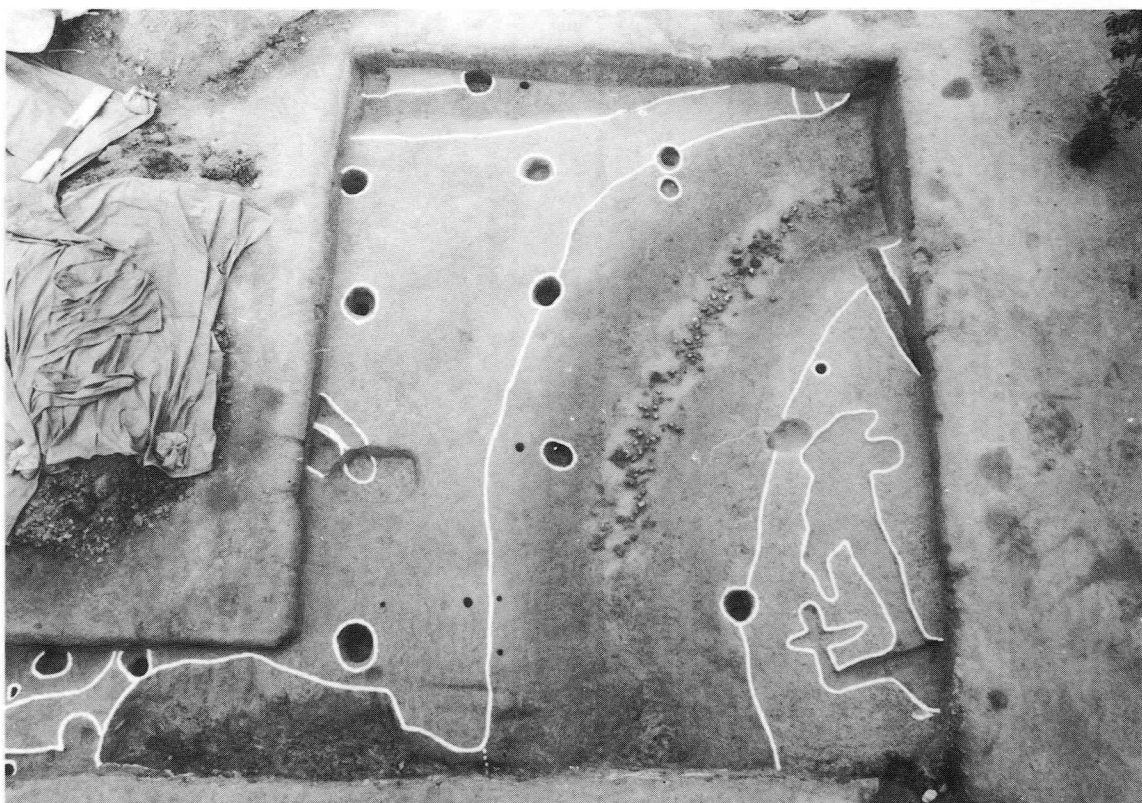
(2) 同 上 土層断面

西より



(1) 第1調査区上層SB-85301全景

西より



(2) 同上下層1号墳周濠全景

西より





(1) 第1調査区1号墳周濠全景

北より



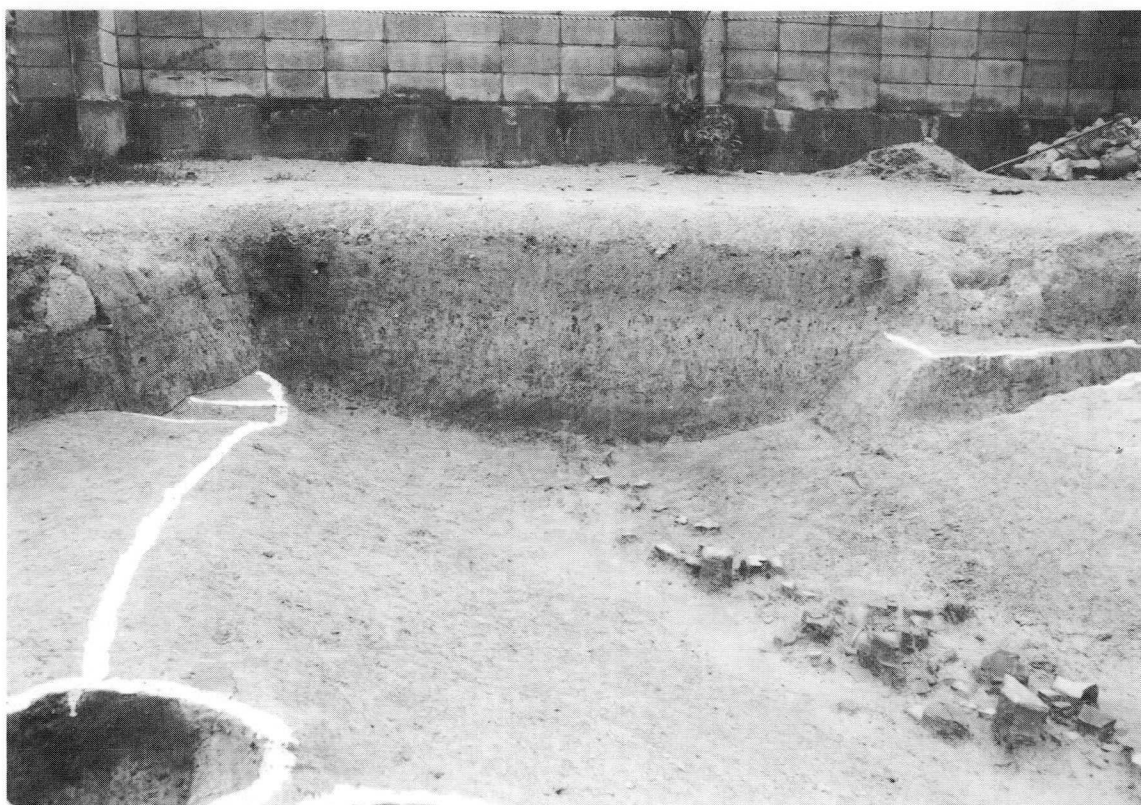
(2) 同 上

西より



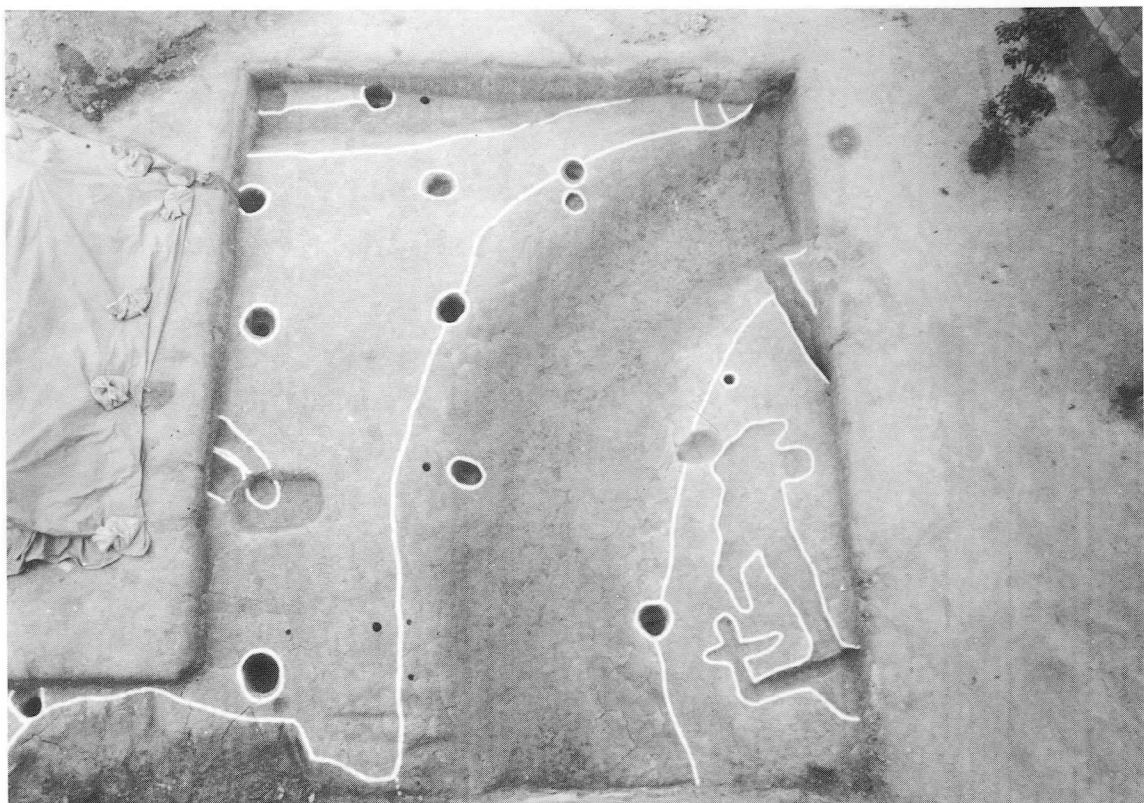
(1) 第1調査区1号墳周濠 遺物検出状況

北西より



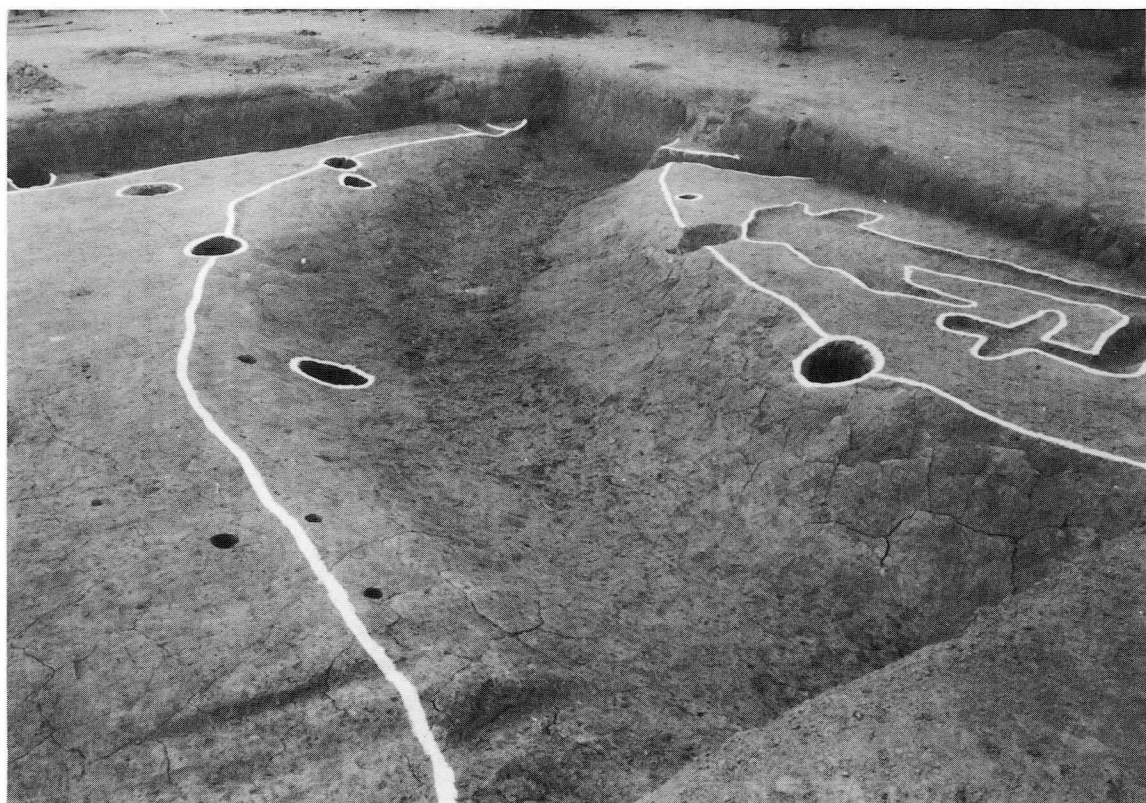
(2) 同上土層断面

北より



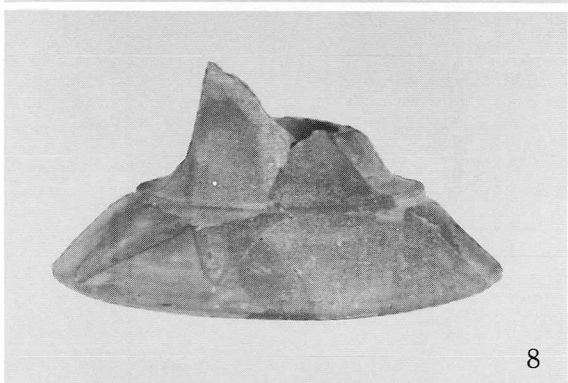
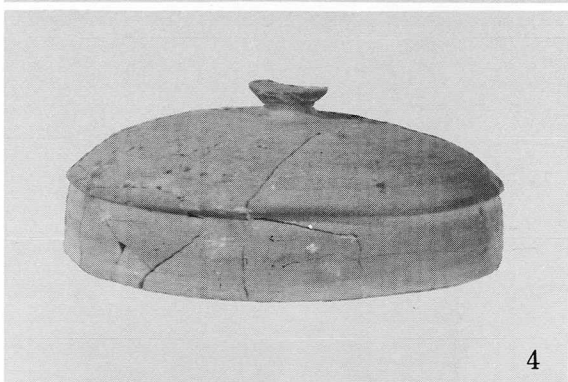
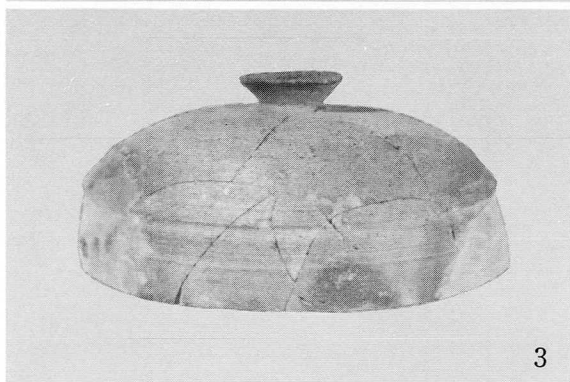
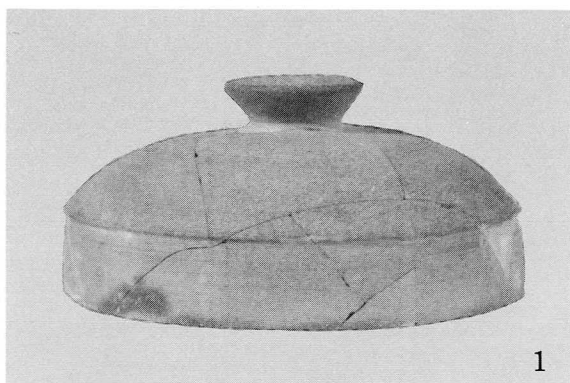
(1) 第1調査区1号墳周濠 完掘状況

西より

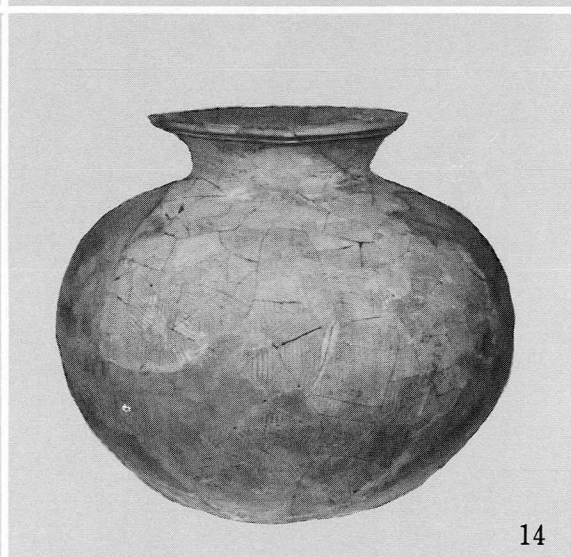


(2) 同 上

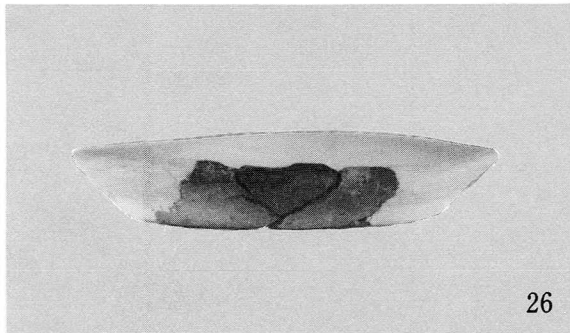
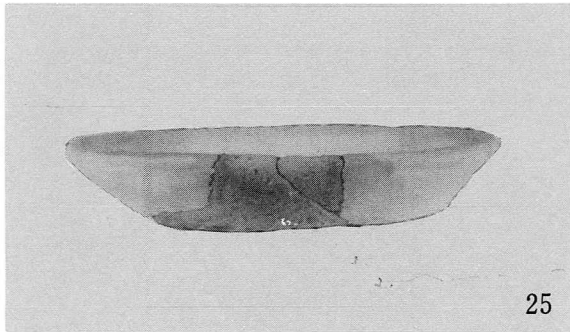
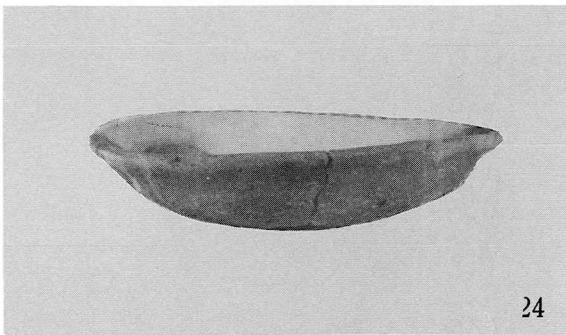
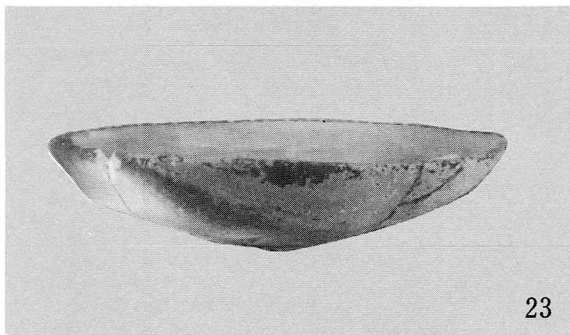
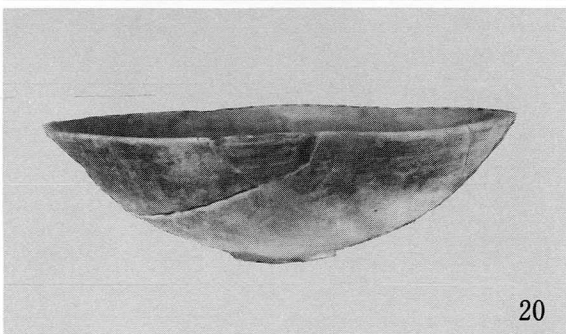
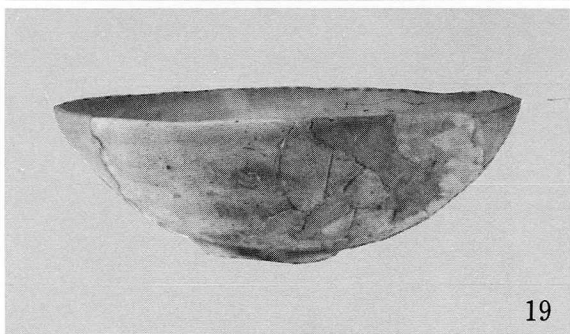
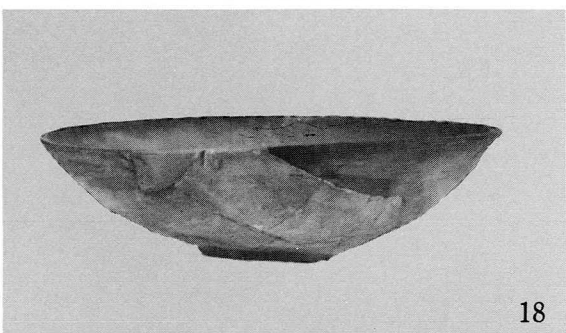
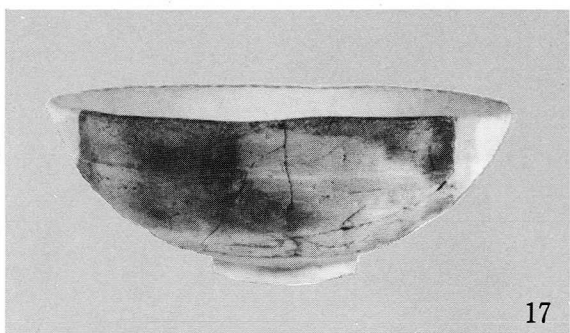
北西より



須恵器坏蓋(1~5)、須恵器高坏脚部(8)、須恵器有蓋高坏(9・10)



須恵器有蓋高坏(11・12)、須恵器無蓋高坏(13)、須恵器甕(14)、須恵器台付有蓋短頸壺(15)、  
須恵器器台(16)



黒色土器碗(17)、瓦器碗(18~20)、瓦器小碗(23)、瓦器小皿(24)、土師器小皿(25・26)、土錘(30)

貝塚市埋蔵文化財調査報告第11集

貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅷ

印 刷 昭和61年 3 月25日

発 行 昭和61年 3 月31日

編集・発行 貝塚市教育委員会 〒597  
大阪府貝塚市島中 1 - 17 - 1

印 刷 ㈱帯谷印刷所

貝塚市北町19番14号